法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

人と学問 : 研究生活の回顧 : 村串仁三郎教授退職記念座談会

MURAKUSHI, Nisaburo / HAGIWARA, Susumu [Moderator] / MASUDA, Toshio / IIDA, Takashi / 増田, 壽男 / 萩原, 進 [司会] / 村串, 仁三郎 / 飯田, 隆

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / The Hosei University Economic Review
(巻 / Volume)
73
(号 / Number)
3
(開始ページ / Start Page)
43
(終了ページ / End Page)
113
(発行年 / Year)
2006-03-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004373

第二部

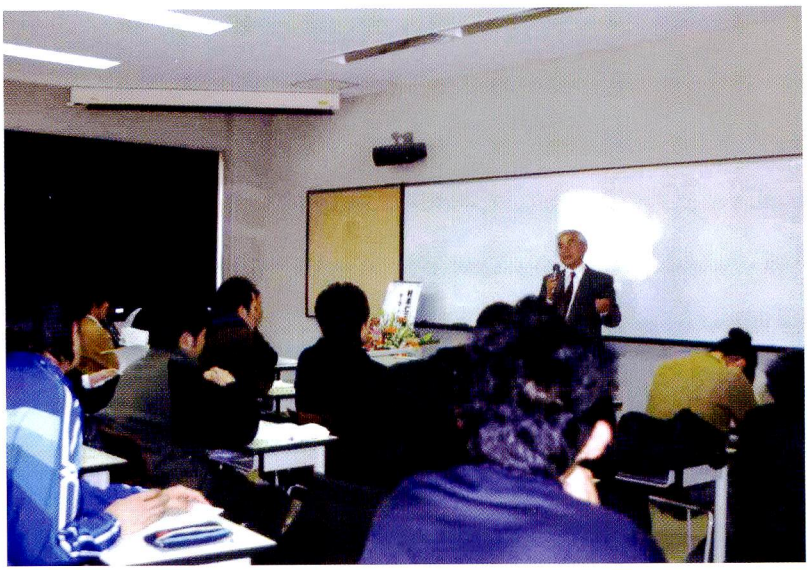
人と学問：研究生活の回顧

―村串仁三郎教授退職記念座談会―

開催日：2005年11月11日（金）
場　所：法政大学市ヶ谷キャンパス
　　ボアソナード・タワー19階経済学部資料室

参加者：経済学部教授　村串仁三郎
　　経済学部教授　飯田　隆
　　経済学部教授　増田　壽男
司　会：経済学部教授　萩原　進

退職記念歓送会　絵所経済学部長の挨拶と村串教授夫妻
（2006年１月15日　於 ボアソナード・タワー26階スカイホール）



村串教授最終講義の風景
（2006年１月10日　於 経済学部棟306教室）

萩原　法政大学の経済学会は，定年で退職される先生に対して退職記念号という『経済志林』の特集号みたいなものを長らくずっと出してきました。退職記念号といっても普通の号にただ退職記念号というかたちで，寄稿者が若干増えて，それと最終講義を載せるという程度だったのです。ちょっと退職記念号としてはお粗末だという感じがしましたので，今年から編集方針を変えまして退職記念号はもっと立派なものにしようと。1人の学者がアカデミックな生涯を，一応大学との関係での生涯を終える，閉じる，そういうのを記念するのにふさわしい号にしようということで，退職記念号は3部に分けて3部編成にするようにしました。

第1部は従来どおり最終講義を載せる。それから第2部は今回新しく設けましたコーナーなのですが，座談会とか，あるいは鼎談とかインタビューというかたちで，退職される先生からこれまでの研究の歴史といいますか，研究生活回顧というのをしていただく。それが第2部の構成です。第3部は普通どおりいろいろな人の寄稿ということになります。今日はその第2部のインタビューとか，あるいは鼎談とか対談とか座談会と言っている研究回顧をやりたいと思います。

村串先生の，やがて来年2006年の1月ですか，最終講義がございます。そのときの司会を飯田先生にやってもらうことになっていますので，今日も主として飯田さんにインタビュアーをやっていただいて，増田先生と私が途中でいろいろな質問やコメントを交えるかたちで進めたいと思います。それでは飯田先生，お願いいたします。

プロレタリア文学者になりたかったのだが……

飯田　既に村串先生には大原社研の雑誌で「研究回顧」という題目でこれまでの研究を回顧された文章ができ上がっておりまして，我々もこれをいただいて読まさせていただきました。大体，研究者としての出発点である大学院時代から助教授時代，そして教授前期，教授後期というように区分されて，それぞれについてお書きになっておられますので，これをベー

スにしながら，ここでまだ書き足らなかったこと，あるいは書かれていないようなこと，あるいはもう少し掘り下げて言うべきだったというような事柄，そういうことを我々のほうでもさらにお聞きしたいというところもありますので，そうしたところからお話を伺っていきたいと思います。

まず法政大学に進学をされ，働きながら学ばれたという大変苦労をされながら学生生活を送られて，その過程でマルクス主義を中心とした勉強をされて，より一層勉強をされたいということで，大学院に進学されたということです。こちらの回顧録を読まさせていただいた限りでは，いわゆる「政治の季節」ということで，勉強どころではなく集会や政治運動などに大変時間を割かれたようにお書きになっていますけれども，まずそうしたなかでいつ勉強されたのか。勉強の時間をどう割いて，マルクスの『資本論』やエンゲルスなど基本的な，基礎的な文献を勉強されたのかということからお伺いします。

村串　大体，社会に目覚め，左翼の洗礼をうけたのは，高校１年生の終わり頃でした。高校は，日本橋高校という有名ではないところでしたが，そこで社会科学研究会というのに入って，もっぱらそういう学生運動……，高校生だから学生運動とは言わないけれども，わだつみの会とか高校の社研だとか，いわゆる民青とか，実は文学少年だったので演劇運動とか，あるいは地域でコーラスとか，そんなことばかりやっていたんです。

もともと大学へ行こうと思っていなかったので，大学受験のための勉強は一切しないで，一般の左翼少年がやっていたように，つまり世の中に目覚めるとマルクスだのレーニンだの，あるいは『共産党宣言』だの，あの頃はスターリンの『レーニン主義の基礎』というのがバイブルで，そういうのを一生懸命勉強していた。マルクスの古典なんていうのではなくてね。

高校生時代は，つまり『研究回顧』に書いたけれど，どういう人生をこれから生きていくかということで大いに悩みましたが，今言うのは恥ずかしいけれども，小説家になりたい，プロレタリア作家になりたいというの

が貧乏人の私としては最大のやりたいこと，成し遂げたいことでした。貧乏で大学へ行けないから労働者の中に入ってプロレタリア小説を書く，労働者文学をつくるという決心を密かにしてました。

だけれど，いざ高校卒業の段階になると仲間がみんな大学へ進学するわけです。何かやっぱりこのまま労働者の中へ入っていくということに対する大きな不安みたいなものがよぎるのでした。労働者の中に入ってちゃんと勉強できるかなと。つまり残業や長時間労働の中で勉強なんかできるのかなという心配が先にちらついて，その労働者の中へというような気持ちが動揺して萎えてしまい，折衷的に，夜間部の大学へ入って昼間は働いて夜勉強するコースを選択しました。

大学に入っても結局勉強の仕方というのは，要するに当時の左翼の勉強のスタイルで，教科書風な，例えばソ連アカデミーの『経済学教科書』，弁証法だの唯物論だのといったって，なかなかマルクスやエンゲルスの原典までいかないで，その解説書みたいなものばかり読んでいました。私は熱烈なるソビエットロシア・ファンだったから，ロシア民謡とソビエットロシアの小説と，今にして思えば浅薄な教科書ばかりを熱読してました。

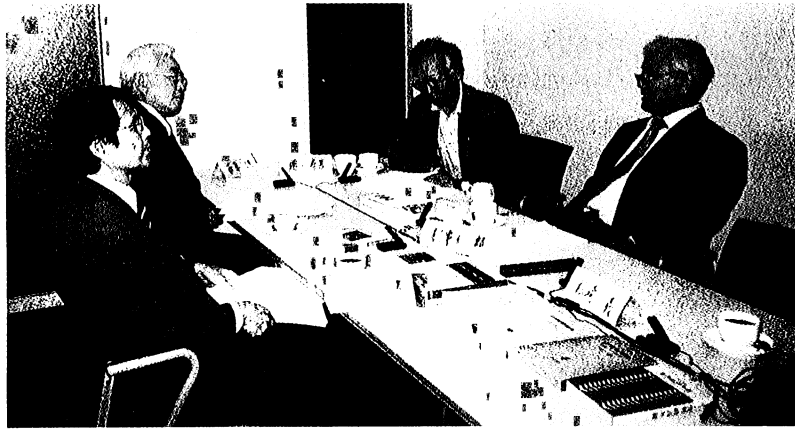
萩原　ちょっとここら辺で青年期のところをお聞きしたいのですが，戦後の1960年代に入る頃までというのは左翼，社会主義運動にコミットした若者というのは，大体革命家志望が多かったと思うのです。普通に会社に就職してサラリーマンとして生きていくのと，職業革命家として生きていくという，二つの人生のいつも選択に悩んでいたというような人が非常に多かった。もちろん左翼の中の話ですけれども。そういう世界とも無縁に生きていた人もいたんですが……。

あなたの場合は作家。その作家志望というのはちょっと変わっているなと。私の周りにもいっぱい共産党の専従になって一生革命運動をやりたいという人はゴロゴロいましたが，作家志望というのは非常に少ないんです。ちょっとそこら辺の事情を聞かせてほしいのですが。

村串　簡単に言ってしまえば，要するにあの頃，つまり高校生，大学生

の頃には，私にとっても，職業革命家というのが最大の課題で夢でしたが，でも私は劣等生だから，そんなに大それた考えはとらなかった。

その職業革命家というのはある種のエリート，つまり共産党の大幹部なわけだから，そういうのは優等生がやることであって，私など劣等生は，そういう方向では自己実現できない，目的を達せられないということで，小説家ならピンからキリまであって，売れなくったって，自分らしい何か小説の世界が築けるんじゃないかと思ったわけです。そういうことで小説家になりたいと。劣等生のあかしみたいなものだね。(笑)



萩原　何か例えば徳永直とか，そういうあこがれていた労働者出身の作家というんですかね，そういう人がいたんですか。

村串　そういう事情はいろいろあるんですが，もちろんプロレタリア作家のものは随分読んだけど，日本の古典的文学なんか読まなかった。そういうのが当時の左翼の悪い風潮で，そういう風潮に毒されていました。小説家になりたいといったって，あまり日本文学とか世界文学というのをまともに読んでないんですから。

ただ大変身近な事例として，実は私は向島で生まれて千住で育ったのですが，千住が生んだいわば最大の作家がおりました。皆さんご存じかな，

早乙女勝元。私が荒川の北側の貧民窟に住んでいたとすれば，彼は南側の貧民窟で，北千住のちょっと奥の柳原という，もう本当に貧しい人たちが住んでいた。長屋も三軒長屋，四軒長屋で本当に軒の低い，背の高い人だったら鴨居にぶつかってしまうような，そういうところに住んでいた。

萩原　北千住の駅のすぐ近くの……。

村串　裏。東側のほうでね。

萩原　今でもかなりごみごみしていますね。

村串　私は高校生の頃，彼は中学生を中退したのかな，16歳か17歳で『下町の故郷』という小説とはいえない手記みたいなものを，確か華書房から出版して，千住あたりでは有名人で，千住あたりの文学青年たちは，あこがれていました。何かの集会で彼が小林多喜二の「お母さん」とかいう詩の朗読していたのを聞いて，感動した。ああ，そうか。こういう人生があるのかと。

それで後に早乙女勝元のその後の小説を見てみると，何かくすぐったくなるくらいに労働者の素朴な生活を描いているのでね。『ハモニカ工場』なんていう小説もそう。何か気恥ずかしい，文学というにはほど遠いのだけど，逆に言うとああいう素朴な下町の労働者の生活を書いたという人はあまりいないので，彼は最後まで小説家として生きて，そういう素朴な労働者の姿を描いていった作家として大成したと言っていいと思うんです。初期の彼を見ていて，ああ，おれもああいうスタイルだったら何かやれそうだと，そう思った。

それともう１人，実は柳原に築地小劇場の座付き作家というのがおりまして，この人は早乙女勝元の……。長いな，こんなことやっていていいのかな……。（笑）ここだけで終わってもいいんだけれどね。早乙女勝元のお師匠さんが実は菅谷俊一という築地小劇場の座付き作家だったんだよね。もちろん共産党の人で。私もこの人の門をたたいて，ぜひ小説家になりたいと。いろいろ人生相談に乗ってもらいました。高校生の頃は一幕物の芝居などを書いて，なんと「長屋の人々」という貧しい人々を書いた。

それで高校生のときは勉強をしないで友達と一緒に芝居ばかり見て歩いたわけです。

その菅谷俊一一門に新協劇団の女優さんがいて，私が17歳か。彼女が27歳ぐらいの大先輩で，その人がまた情熱的で面白いんだよ。蔵原惟人などを非常に崇拝している人で，蔵原惟人の『政治と文学』とかっていう評論集なんかを読んで感動していたんです。その彼女に一幕物のあれを見せたんだ。そうしたら全然褒めてくれない。（笑）それで，ああ，おれは才能ないなと思って。

普通小説家志望なんていうのは非常にませていて，小学校や中学校の頃からもう小説ばかり読みあさってというタイプが多いんだけど，私の場合は全く逆で，ほとんど日本文学なんか読んだことがない。パラッパラッと読み始めたというだけで文学者になりたいというのはおこがましいなと，そういう気持ちもあって文学者になりたいという願望を持ちつつ，やっぱり大学へ行って勉強しようと。文学よりまず大学生程度の勉強をしたいということでした。

だから職業革命家になろうという気持ちは，実はこっそりなくはなかったけれど，それを追求はしなかった。友達はたくさん職革になってはいるんだけど。あんな不勉強なやつが職革になっていいのかなという人もいました……。（笑）

社会学部の夜間部に入る

飯田　それで小説家になるために労働者になるという方針を貫けないで，大学の夜間部に行って働きながら学ぶということで法政大学の社会学部に進学された。これは麻布時代ということで，共産党系の先生が多いという話ですが，何かその影響とか受けましたでしょうか……。たぶん今の法政大学の社会学部も含めて，特に昼間部のあり方と随分違っていたと思うんです。そのあたり。

村串　昔の大学というのはみんな勉強をしたいやつが来ていた。特に夜

間部の場合は，みんな勉強をしたいと思って大学にきていた。それぞれがみんな歴史を持っていて，平事件の被告とか，日鋼室蘭争議で首切られた青年労働者，繊維女子労働者で，組合から派遣されて来ていた人，労働組合に挫折したり，レッドパージになってしまってもう一度勉強したいという人たち，本当に山奥から食うや食わずで勉強に来たとか，そういう人たちがたくさんいたわけね。

いろいろなタイプがあって，例えば大羽奎介君という同級生がいたが，彼は鹿児島ラサール出身で，東大を2回受けて落っこちてしまって社会学部の夜間に入ってきた。だからもう抜群にできるわけです。東大へ行けなくったって，よその私立に行けたかもしれないけれども，あえて法政の社会学部に入ってくるというのは，つまり左翼的というよりも共産党の牙城みたいな，そういうところに魅力があったのでしょう。

だから向学心に燃えて一生懸命みんな勉強していたというのは事実です。それと比べると今の人たちはそういう向学心なんておよそない。就職のためとか，あっちの大学に入れなかったから来ちゃったとか，そういうこと。だから大羽君なんかを見ていると東大を落っこちてしまってたまたま法政へ来たけど，コンプレックスの微塵も感じられない。

大羽君というのは知っているでしょう。彼は法政の大学院政治学科に入ってマスターを終わるときに「平和経済」の関係で，高橋正雄さんの口利きでユーゴに国費留学で行ってしまって，それっきり帰ってこない。現地人と結婚してユーゴ通になって，最後，ユーゴの大使になりましたね。(笑) しかし突然死んでしまいまして，……あれから一度も会っていない。

増田　村串さんがちょうど社会学部にいたぐらいのときっていうのは中央労働学園から移ってこられた先生が結構いっぱいいらっしゃったでしょう。先生だった長谷川先生もそうなの？

村串　そう。要するに中央労働学園というのがあって，それが社会学部を新設する母体になったんですね。だから宮本顕治の前か，戦前の共産党中央委員委員長だった逸見重雄さんとか，私の先生だった長谷川博さんと

か村山忠義さん，あと農村問題の山本巌さん，栢野晴夫さんとか，当時としては錚々たる人がいた。共産党員じゃない人もいたが，共産党員も多かったですね。

萩原　ちょっとそこのところ補足しておきます。大正の中期に協調会というのが設立されて，日本の労使関係を協調型の労使関係にしていくためのいろいろな啓蒙活動を行う団体でした。それが東京に社会政策学院という学校をつくったわけです。

それが戦後，協調会も解散し，中央労働学園というのに社会政策学院がなって，現代でいうと labor education というか，労働教育というのを始めた。それは社会政策学院のときからそうなんですが，半分公的な，半分民間的な教育機関で非常にユニークなものです。それが後に法政大学の社会学部の母体になったといいますか。

村串　社会学部ができても中央労働学園というのはまだ実際あったんだよ。中央労働学園の女性園生とスクエアダンスして楽しんだことがあった。私の家の近くの米屋さんの息子がその中央労働学園に通っていまして，全電通の役員でしたが，「えっ，こんなところで」とお互いに驚きました。実はその人は神山茂夫派の人だったんだけど。（笑）こんなことどうでもいいんだけど。

それで共産党大幹部の神山茂夫がスパイだと除名されたときに，その人が「いや，村串君，神山さんってそんなひどい人じゃありませんよ」と言われてすごくショックを受けて，それで神山の『天皇制に関する理論的諸問題』や一連の彼の国家論などの本を読みあさって，こんな偉い人はどうもスパイじゃないんじゃないかとか思ったりした。中央労働学園理事の川島という人が，共産党中央から神山派スパイに関連して査問され，自殺する事件がおきてまたびっくりした。これも一種の体験で勉強になりました。

萩原　あれ何年でした，法政大学の社会学部に編入されたのは。

増田　村串さんは何年卒？

村串　私は昭和33年度卒で，私は３期ぐらいなんだよね。１期生というのは私の先輩である松島春海さん，松島栄一の弟なんだけど，それに社会学部教授になった斎藤博孝さん。労働組合史のエキスパート渡辺悦次さんは卒業してないが，１期生だったかもしれない。

飯田　昭和27年ですね。27年に法政大学が中央労働学園を吸収するかたちで合併をして，昭和27年，1952年度から村山さんとか山本さん，栢野さんなどが社会学部の教員になるかたちで発足をするわけです。

増田　ちょうど４期ぐらいか。

村串　そうだよね。１期が……。

増田　おかしいじゃない，27年だと。29年だろう，卒業。

村串　違う，違う。だから１期生は４年たたないと卒業しないから，昭和31年に１期生が卒業だ。31，32，33……。あっ，私は３期生だったかな。だからその労働学園時代の雰囲気というのがまだ残っていたんだよね。

飯田　今の話だとそういう一緒に勉強される友達というか，その影響のほうが大きいということですか。あまり先生方の影響はなかった。

村串　私は法政大学に入ったというのが半分で，半分はつまり労働者教育をやっていた労働学園の前身に入ったということにウエートを置いて，「おれは労働者教育のところへ入ってきた」という意識だった。だから，あまり法政大学に入ったという自覚は実は入った頃なかったんです。でも学生運動をやって，自治会運動やなんかをやっているとやっぱりどうしても学生気分になってきて，法政の仲間内の連中が気になる，「ああだめな奴が多いなあ」と感じたりした。もちろん立派な学生もいたのだが。

社会学部は，２年目にもう麻布から市ヶ谷に移ってくるでしょう。そうすると昼間の学生の不勉強なとぼけた連中と付き合うわけでしょう……。

萩原　幼稚な学生ね。

村串　幼稚な大人じゃない，そういう学生運動を見ていると，ひどいものだと。それで変に頑張っていました。学生運動の面でも私流に言えば非

常に大人びた運動をやっていて，普通の学生運動とは違った結構新しい運動をやっている。法政の学生運動史には名の残りそうなことをたくさんやっていた。面白いことをやるのが好きで，新しいというかね。

全力投入した卒論―「高島炭鉱の納屋制度」―

増田　大学の4年生のときに「高島炭鉱の納屋制度」を書いたんですよね。だけど4年まではもうほとんど何も勉強していないわけでしょう。そこでウワーッと一気に……。

村串　というか，要するに長谷川ゼミに3年から入って，つまり長谷川ゼミに2年間入ってやっていたわけだけれど，やっぱり社会学部というか，中央労働学園というか，そこの勉強の雰囲気というのがあって，長谷川先生は実は山田盛太郎の3年後輩で，山田さんと親しくて山田さんの話ばかりしているわけです。何かの調査で蔵の中に女学生と入って，2時間も3時間も出てこないので，周りの人が心配したとか，ばかばかしい話から学術的な話までいろいろ……。

それで当然3年のときに例の『日本資本主義分析』を読まされて，いちころだった。山田分析呪縛に引っかかって，もう山田盛太郎みたいな文章をたくさん書いたわけだ。私の書いた2部社会学部自治会の運動方針など山田さんの『分析』スタイルで画期的だった。あのなんというか，図式の素晴らしさというか，すごく感動して「ああ，すごい。日本の学者でもこんなに偉い人がいたのか」というように思いつつ……。

ただ，そのときに面白いのは，いわゆる講座派と共産党はかならずしも一致しているわけではなかったから。講座派と共産党の本部とはときどき意見が合わなかったんだけど，長谷川さんは中央委員会派なんだ，中央直属の仕事をしていたから。だから長谷川先生というのは，山田一辺倒ではなくて「村串君，これはいろいろ問題のある本だ。いい本だけど批判的に読みなさい」と言ってくれてね。ああ，それじゃ，ぜひ批判的に読もうというので読んでいた。

それからもう一つは長谷川ゼミの大先輩たちに大変勉強家がいて，１人はさっき言った松島春海さんという人で，最後は埼玉大の教授をされていて，数年前亡くなられたんだけど，彼は，長谷川さんが鉱山史が好きだったその影響で，足尾銅山史の卒論を書いた。

それから私の一つ先輩は，長崎出身で高島炭鉱史の卒論を書いていた。渡辺悦次さんたちは米騒動のことをやって，学生の分際で割とみんないっぱしの研究をしたのね，そういう雰囲気の影響をうけて「おれも一つ何か書きたい」と思ってました。

私が卒論の研究を始めるときに長谷川先生が，「村串君，これ松島君の……」といって。400字で250枚ぐらの卒論を読ませてくれた。読んで，「ああ，すっげえ，こんなもの書いてみたいなあ」と思ったけど，松島さんの卒論なんて乗り越えることができそうにないし，足尾銅山という名前におじけづいてしまい，私の仲良くしていた先輩の人が書いた高島炭鉱史の卒論を読んで，「これは大したことない，これなら乗り越えられそうだ」と高島炭鉱史を卒論のテーマに選んだ。

ただ私としては，卒論を書くのには，特別の目的があった。今まで私たち左翼の人の最大の弱点は自分でものを考えないことだった。常に党中央の方針を赤旗でみて，それに無条件にしたがってきた。だからそういうのをやっぱり自分でよくないと思っているわけだよね。自分で考えたい。だから卒論をモデルに一度自分で考えてみようとしたわけです，実験的にね。

そう反省するのには，もちろんその前にいろいろあったわけです。六全協とかスターリン批判があって，権威に盲従してきた私は，私なりにものすごく反省していた。だから学生運動も一切やめて，１年間ほとんど卒論の作成に没頭していた。これは，私にとって最高の勉強でした。ある意味ではレーニンを読んだりマルクスを読んだりするよりは400字300枚の論文を書くことが私にとって決定的に意味を持ってきたという気がする，今でもそう思っている。

飯田　この明治期高島炭鉱の話というのは何か手引きとなるような研究とか，それまでの先行研究というんですか，そういうのはあったんですか。

村串　いや，別に……。論文は何本かありました。あったけれど，要するにあまり実証的ではないということと，資料がないからあまり詳しくなかった。ただ，資料はあるらしいというのはあって……。

実は『高島石炭坑記』という幕末の高島炭鉱をめぐる資料（写本）があったのね。それはまだ誰も使っていなかったんだよ。部分的に使っていた人がいたけれど。ところが私は人の論文はあてにならないから，自分でというので高島炭鉱に１週間ぐらい行って，あそこにある限りの資料を筆写してきた。それから長崎の図書館で手書きの資料をたくさん集めて，それで論文を書いた。

隅谷三喜男さんが私の入る１年前ぐらいに高島のほうに行って，同じ資料を筆写して帰っているんだけれど，隅谷さんはそれを使って論文を書いてない，実は，チョロと使っただけで。この資料を使って書いたのは基本的には私だけで，その後，『高島石炭坑記』は復刻されて誰でも見られるようになったのだけれど，それでも私の研究以上のものは今も出ていないようですよ。

幕末から高島炭鉱というのは鍋島藩が経営していて，それが例のグラバーの所有になって，そして三菱がやってと。その間の非常に細かい資料をたくさん発見して，それを整理して，大学生の私が結構面白い論文が書けたわけだ。

そのときに飯田君が言っているあれだけど，山田盛太郎の図式の中に納屋制度というのが半隷農的労働システムだとか何とかばかなことを書いてあったので，どうも何かちょっと違うなと思って，突っ込んで調べたらもう全くでたらめで……。そのときに山田盛太郎の図式というのは実態調査を伴わないで，要するに自分の思い付きと構想力でやったなと思いました。そういうのを発見したときの喜びというのは大変なものでした。大先

生の理論をみんな信じているわけだよね，まだ1960年前だから，みんなまだ山田盛太郎ってすごい理論家だと思っていたから……。

講座派からだんだん離れていく

萩原　その頃の日本の社会政策学会の空気をちょっと言っておかないと……。要するに1951年に日本共産党が新綱領というのを発表する。日本はアメリカの帝国主義の植民地であり，半封建制国家であると。植民地的に隷属した，要するに近代資本主義国家ではないということでね。

それを受けて社会政策学会の主流派というのは，賃労働の封建制ということで，本もその頃いっぱい出ていますが，日本の財閥系の大企業でも全部それは封建的な雇用関係で，近代的な雇用関係じゃないということです。その51年綱領が実践された結果，いわゆる火炎瓶闘争というので共産党が壊滅的な打撃を受けて，社会政策学会も動揺してしまった。

その中で講座派の神様みたいな山田盛太郎さんの『日本資本主義分析』は，その理論的基礎であった。それの信頼が動揺してくるという時期が村串さんの学生時代だった。そこで結論はあれですか，封建的な雇用関係ではなくて近代的な雇用関係だと。山田さんのは間違っているということですか。

村串　私の時代は，左翼の大学生は，いわゆる日本資本主義論争というのをみんな勉強したわけだ。例えば小山弘健の『日本資本主義論争史』（青木文庫の上下）などを手引きにして，労農派対講座派の論争，あるいは日本の革命戦略論争も含めて一生懸命勉強した。

私は，気分的には講座派なんだよね。おれは講座派の末裔だみたいな自覚があるんだけど，理論的な中身についていうと，例えば明治維新ブルジョア革命説とか，これは労農派の主張を支持したね。

中身的にいうと随分労農派の主張に同意するところがあって，だから半封建的とか封建制を強調する理論というのに結構批判的になっていた。しかもレーニンの『ロシアにおける資本主義の発展』なんかを読んでも，ど

うも封建制を強調するのはおかしい。マルクスの「資本と賃労働」なんかを読んでも，やっぱり資本が中心なんだ。それをマルクスか，レーニンか，どこかで書いてあると思うんですけど，封建的な衣をまとって資本が出てくると，そういう言い回しがあるんですよ。

だから納屋制度とか親方制度とかサブコントラクトシステムの請負業とかというのは，封建的な衣であって封建制ではない。あくまで高島炭鉱の経営は三菱資本なので，資本がそういう飯場頭を雇って中間管理職をとおして鉱夫を支配しているという，そういう発想なのね，私の納屋制度論は最初から。

山田さんの理論は，そうではなくて，何かすごく封建的なものと捉えてしまうわけですよ。それに追従した人たちが，マルクス主義じゃないような人たちも，そういう納屋制度とか飯場制度というのを封建的だとか封建制だと騒いで……。でもあえて言えばその納屋制度の悪辣さを利用しているのは資本なのであり，納屋制度＝封建制論は，封建制が悪いのであって資本が悪いんじゃないと言って，悪辣な資本を免罪する理論だと考えたわけです。

私の大学生の頃には，そうじゃなくて資本が主役であるという反資本の論理で封建制を強調しないという，そういう雰囲気が少し生まれてきていましたね。実際，高島炭坑史を分析してみると，そういうことだとよくわかった。

話が飛びますが，例の共産党綱領論争の，二つの敵論ね，実は綱領はアメリカ帝国主義が主要な敵論なのだが，私は，最初から，日本独占資本主要敵論を支持していました。納屋制度論と同じ論法ですよ。

萩原　現時点から振り返ってみると，その後，日本の経済史，経営史の学会でも相当研究が進んできて，明治の日露戦争ぐらいまではまだ基本的に請負制で，企業が仕事を親方に請け負わせてチームで工場の仕事をする。それがものすごく労働移動が激しいので，手を焼いて直接雇用にすると。親方層というのはスーパーバイザー，監督者にして直接雇用すると。

そうすると飯場が炭坑住宅に変わり，それからその管理が企業の人事管理の一環の中に包摂されてくると，親方に請け負わせていたのとは違った仕事の仕方が出てくる。

そういうので東大の兵藤先生などが間接的雇用システムから直接的雇用システムへの転換と。要するに現代風に言うと内部労働市場化が進んでくるといいますか。それは同じ資本主義的な企業の経営史のいわばステップなんだよね，ステージというか。だからその封建的というのはまさに封建制からだんだん資本主義に移行していくという話ではないんですよ，現段階の労働史の研究では。そういう意味では非常に現代の水準につながってくる研究なんだけど……。

当時，その請負制から直接雇用への転換ということはあまり意識しなかったですか。親方請負制から……。

村串　そんなことないよ。だって納屋制度が廃止されれば，当然直接雇用になる。ただ私は間接的とは言わないで，中間請負制度を媒介にしたと言って……。ただ，その中間請負制度は鉱山の場合は2段階ぐらいあって，つまり作業請負をする。採炭業務を請け負う。これは今の建築業の子会社，下請けみたいなものです。それから私が言っている労務請負というのがある。生産は請け負わない。基本的には資本のラインが支配するんだけど，労働の指揮を代行すると言っているんだよね。人を集めるとか労働を具体的に，鉱山用語で言えば繰り込む，要するに坑内に鉱夫を配置するやつね。そういうのを請け負う。

請負といったって，実際請負になっているけど事実上は中間管理職なんだよ。その構造を企業のそれぞれの実態に合わせてしっかり見ろというのが私の意見で，隅谷さんは，作業請負をするのが棟梁制で，労務請負をするのが納屋制度だと言ったんだけど，そんなに名称で単純に割り切れない，ごちゃごちゃしているわけですよ。これは隅谷さんお好みの図式でね，もう死んじゃったから何を言ってもいいけど……。（笑）そういうこと……。

萩原　隅谷先生は終始一貫あいまいなんですよ，あの人は。(笑)

村串　だから逆に彼は私のことが非常に気になって，いつも私の論文を読んでくれていました。ただ私は萩原君が今言うように，自分がやっている研究が今の学界でどういう位置にあるかなんていうことは，あまり関心がなくて勝手にやっていた。そうしたら結構いい水準の研究だったということなんだけどね。(笑)

そのあと経済学部に就職してから，九大に行ってしまった矢田俊文君に，「村串さんの研究は，いいんだけど，研究史がない」と痛烈に皮肉られて，「いや，おれ研究史なんて大それたことをやるつもりはない」と弁解しておいたが。やっぱり東大からきた奴はそういうところが違うなあと感心した。

だからあとの友子研究では研究史をしっかり書いて，自己宣伝したわけだ。あれは矢田君のなせるワザなんだ。私は人がどうのこうのってあまり気にしない研究スタイルなんだよね。でもやっぱりそれをやらなきゃいけないんだなと思って。

高島炭坑史は，つまり実は昭和32年に書いたんだよ，学生の私が。同じような研究をやっていたのが片や私より二つ上だけど，東大生だった例の二村一夫さん，足尾銅山史をやっていたんだよね。大学院の頃「労働運動史研究会」で彼の報告で聞いても全然驚かなかった。おれだって……。

萩原　ああ，似たようなことをされたから。

村串　松島さんだってやってるんだと言ってね。

萩原　ただ何となくその賃労働の封建制という議論が色あせてきていて，新しい研究が出始めた時期だね。

村串　それはおそらく私だってあちこち論文を読みあさっているんだよね。きっとそういう刺激的なやつをこっそり入れたんだと思うよ。

飯田　それはだけどたぶん大学院でオーバードクターの際に改めて助手としてやられたときに，かなり自覚されてやったんだと思うんですが。

村串　いや，全くそのとおりで，学生のときは全然自覚がなく，自分が

何をやったかよくわからない，非常に実証的にやったということだけだから。ただオーバードクターのときに何か論文を出さなければいけないというのでまとめて公表した。ほとんど内容には手を付けてない。変えてないよ。そのまま出した，活字にしたというだけで。だから私なりに大したもんだと思っているんだけど。(笑)

大学院時代—宇佐美ゼミに幻滅

飯田　またあとでその話を振り返ることにして，その卒論のための取材，資料集めをいろいろやられて，400字300枚の卒論にまとめられて，それで学問というのに目覚めて大学院に進学しようということになったわけですが，最初の私の質問はその辺からの話を聞こうと思ったら，そこまで至るにかなり時間がかかりましたけど。(笑)

それで大学院に在籍している過程で，もちろん生活も大変な思いをされながらいろいろな調査，請け負いのようなことで生計を立てられたりというようなことで，いろいろ勉強もされたようですが，他方で政治の季節であり運動に明け暮れたというような面もあって，いつ勉強されていたのかとか伺いたいと思います。

それからもう当時，このボアソナード・タワーの敷地のところにあった53年館という大学院棟があったと思うのですが，そこでは授業はやられていたと思うのですが，あまり勉強の，あるいは研究の拠点になっていなかったのかなという気もするのですが，その辺のところをお訊きしたいのですが。

村串　私は大学の学部のときから人の講義は聞かないという……。あまり人の話を聞くというのは得意じゃなくて，どちらかといえばそういう講義している人の本を読むというスタイルで，授業はほとんど出ていなかった。それでもそこそこ単位は取るわけです。

例えば社会政策論は平和運動をやっていた田沼肇さんなのですが，自分で社会政策の論文も書いてないし研究もしていので，風早八十二の『日本

社会政策史』を読んでいるだけでした。1回ぐらい顔を出しただけであとは出席しなかった。その代わり風早八十二の『日本社会政策史』を熟読した。そういう勉強のスタイル。

だから大学院に行ってもそうなんです。まだその頃，社会学部には大学院がなかったのでもちろん経済学専攻へ入ったわけで，長谷川先生に相談したら宇佐美君のところへ行きなさいというので，宇佐美先生の門をたたいて，指導教授になってもらった。

あの頃は宇佐美先生のほか宇野弘蔵先生，久留間鮫造先生，大内兵衛先生の三大先生もいたから，一度は顔を出しているんだけど，あまり気に入らなく，出席しませんでした。今思えば，ませていたし，ある種の自信過剰で，傲慢だった。大内さんのゼミに行っても『ロシアにおける資本主義の発展』なんか読んでいるんだけど，みんな全然ちんぷんかんぷんで，とぼけた話をしているので，ばかばかしくてもう出なかった。

楫西光速さんはいつも居眠りしていて，院生が勝手に議論……。楫西さんは例の東大出版の『日本資本主義発達史』シリーズを書いているから，あの本は私も愛読しているけれど，ゼミでの彼の話そのものは面白くもおかしくもない。とてもばかばかしくて3分の1も出ていない。

宇佐美先生のゼミは，指導教授だから，サボるわけにいかないから出ていたけど。彼のゼミも少々つまらなかった。英文の「国家独占資本主義論」とかというかなり質の低い論文を読ませるんで，ばかばかしくて，その程度のことはおれだって書けるんじゃないか，なんて思ってました。だから結局は宇佐美さんの『国家独占資本主義論』とか，あるいは『危機における日本資本主義の構造』とか，そういうのを勝手に勉強していた。

ああ，やっぱり宇佐美さんてすごく偉いなと思ったのは，『国家独占資本主義論』を読んだときで……。昭和23年か24年ぐらいに出した論文をまとめた本ですよね。その時期にあれだけ書けるってすごいと感動した。宇佐美さんに対しては，私はかなり最初から批判的なんです，要するに日本共産党の綱領問題などで。でもあの『国独資』を読んだときは感動した。

つまり彼が34，35歳ぐらいのとき書いたのではなかったかなあ，あっ，こんなのすごいなと思って，しかしその後に書くものはだんだんだめになっちゃうけど……。（笑）これはここだけの話だけど，だんだんだめな論文を書くようになっていって，主体性がなくなって共産党の方針に振り回されて……。だからゼミに出たときには，こっそり批判めいた質問をしたりましたが，宇佐美党の信者に，「村串君，先生に批判的な言辞は，慎んだほうがいいよ」なんて，忠告された。

そんなことをやっているうちに，私は，いつの間にか綱領論争で共産党中央を批判して除名されてしまった。

萩原　ちょうど戦争が終わった直後に，大学に復学してきた国家主義者が急に戦後変わっていくのを見て，みんな先生をばかにしていたというか，そういう時代があったと思うんです。要するにソ連崇拝，51年綱領崇拝をやっていた先生たちがコロッと変わる。はっきり言ってみんな相手にしていなかった，そういう人たちを。みんな独学だよね。自分でもう勉強をして，信用していないから。

村串　特にここは載せてもいいんだけど，宇佐美先生という人の学問というものを私は非常に反面教師として見てきた。彼は『国独資論』から『危機における資本主義の構造』，それから『日本の独占資本』へ移るにしたがって，だんだん中身が悪くなってしまう。『日本の独占資本』になると，「独占資本および独占資本主義についての基礎概念は，マルクス主義を創造的に発展させたレーニン，スターリンの諸労作に依拠することによって，はじめて正しく理解することができる」などと言ってね，完全なスターリン主義になっちゃう。そしてアメリカ帝国主義に従属した日本資本主義論になっていくわけでしょう。ますますの従属理論。

宇佐美先生は偉いなと思う反面，書いているものはひどいじゃないかという，そういうギャップに悩んだ。なんとか自分の先生はいい先生であってほしいという思いと，書いているものはひどいな，それから言っていることもひどいなという。ゼミで土台上部構造論とかという外國人の論文を

読ませるんだが，「おれだってマルクスをもう既に大学生のとき，大学院浪人のときから，それなりに勉強してきているのに，そんな機械的な土台上部構造論はないだろう」と思ってね。だから全然この人はわかってないんじゃないかと……。(笑)

萩原　昔あなたから聞いた話だけど，慶應の遊部久蔵先生が法政に教えにきていて，その講義を聞いて思わず居たたまれなくなって教室から飛び出してしまったというようなことを……。(笑)

村串　それはスターリン批判のあとの話だよね。だからつまり2年生のときだな。

増田　大学の？

村串　うん，確か。講義中に遊部さんがマルクスの価値論にも問題があるみたいな発言をしたんだよ。マルクスを100%正しいと信じていたから，おれは本当に何を頼りに生きていいかわからないというので，脳みそが分解しそうになって教室を飛び出したわけ。もうノイローゼになっていたからね。そういうのを経て大学院生活を送っていたから，かなり冷めてきていた。

それで，ちょっと話がずれて申し訳ない。ゼミで宇佐美先生が戦後の資本主義論争を論じるでしょう。井汲さんがあの頃元気で中間恐慌論だの，今井さんが二重の国家論だのを主張していた。宇佐美先生が，そういう連中をバッサバッサぶった切る，100人切りをするとかなんとかゼミで言っていたわけだ。例の有斐閣の『マルクス経済学講座』の第4巻『日本経済分析』でね。しかしなかなか本が出版されない。それで先輩だった編集者の涌井さんを悩ませたんだよな。結局，予め予告された宇佐美先生分担の「日本資本主義の発展とその国際的地位」の部分は書かれないまま第4巻は出版されたけれどね。

宇佐美さんは，ゼミのときになると大いなる発言をするんだ，「私の宮本顕治君ね，あれはだめだ」とか言っていてね。私もぜひ宮本顕治も含めてぶった切ってほしいと思って期待していたんだけど，とうとう書かなか

った。だからそのときに，「ああ，もう先生は書けないんだ」と思った。

なぜ書けないかという問題は，つまりあるよね。要するにマルクス主義の呪縛とか，共産党とのしがらみ，スターリンを持ち上げたけど自己批判できないとか，かつて若くして権威をえてしまって，自分につくられた権威をぶち破るような自己批判能力の欠如とか，そういうのがあったのでは……。

井汲さんなんか別で，権威をひけらかさないで，あっちへ行ったりこっちへ来たり，宇佐美さんにいわせれば，大した学者じゃないけど，一生懸命，現実と格闘しながら新しいものにぶつかって書くわけでしょう。ECができると，新しい生産関係ができたとか何とか言って，新しい時代に対応しようとした。片や宇佐美さんたちは，新しいものが何か出てきても驚かない。古い尺度でバッサバッサと切る。そういうのを目の当たりに見て，自分もそういう面がなくはなかったから，こんなんじゃだめだなと，つくづく感じましたね。

増田　ドクターのときも，村串さんはやっぱり一気に勉強するタイプみたいね。だって卒論もそうだけど，ドクターも3年の終わりでしょう，あの「欲望論」の論文を一斉に『現代の理論』に書き出したのも。大体もう子供が生まれたあとだ。

貧乏学生を救ってくれ鍛えてくれた調査

村串　ドクターに入って2年目ぐらいに子供ができちゃった。ちゃんとバースコントロールしたのに。それで慌てた。

「研究回顧」にも書いてあるんだけど，大学院時代にいろいろ勉強したけど，大学院で勉強したことは，宇佐美先生を反面教師にしたことと，それからいろいろな政治セクトの，要するに政治論争というものを通じていろいろ勉強をしたんだけれど，それより私が直接勉強になったのはオーバードクターになってからの，要するに委託調査をやったことなんだよね。

東京都経済局の中小企業調査を，うちの大学じゃなくてかみさんが出た

大学の先生のルートからやらせてもらって，その中小企業調査が非常に勉強になった。それは，ものすごく私の学問研究にとって役立った。これは振り返っていくと卒論で何かやったという，そういう自信みたいなものにつながっている。卒論をあんなに書けなかったら，調査なんかいやいや，怖くてやれなかっただろうね。

それでしかも調査を始めたときに，一緒に大学院の連中が何人かいたんだけど，あれは増田君も知っているかもしれないけど，立教の緑川とかと，それから都立大の倉沢といったな，一緒にやったんだけど，私のほうが調査については圧倒的にすぐれていた。

萩原　その博士課程の前に「エンゲルス著『イギリスにおける労働者階級の状態』に関する考察」というのを修士論文として書き，それからドクターへ行くわけだね。これは確か『月刊社会党』か何かに一部，後に載せますよね。ちょっとそこをお聞きしたいのですが，クチンスキーの『労働者状態史』という膨大な研究があるのですが，私の友達がそのクチンスキーの『労働者状態史』というのを修士論文で，大学院でやっていた。私は彼によく，名前は伏せますが，この膨大な本というのは紙くずじゃないかと。

要するに当時議論したのをこういうふうに覚えているのです。エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』というのは，いろいろヨーロッパでも繰り返し復刻されて，そのたびに新しい序文を付けて出されている。19世紀のエンゲルスがもう亡くなる頃ですが，彼は若い頃ロンドンの，イギリスのイーストエンドというのかな，労働者街を書いた頃と比べると，資本主義の青年期というか，荒々しい労働者の悲惨な状態というのを描いているけど，今はもうすっかりなくなっているということを書いているんだよね。

それを受けてクチンスキーは，いや，そうじゃないと。イギリスの労働者階級はかなり豊かになってきている。だけど植民地の労働者はどんどん悲惨な状態になっていくので，世界の労働者階級全体としては絶対的に窮

乏化が進んでいるということを一生懸命，実証していたわけです。インドの労働者の賃金とイギリスの労働者の賃金を平均して，その平均賃金がだんだん下がっていくというものですから，普通ちょっとした人が考えるとばかばかしいという……。（笑）

ただ『絶対的窮乏化理論』と題して有斐閣から新川訳で出たんですよね，翻訳が。それでその点でちょっと興味があるのは，理論としては絶対的窮乏化理論というようなものはありますよ，『資本論』の中に。それは理論的におかしいと，宇野さんたちはあれは理論として成立しないというようなことをもう繰り返し言っているわけです。だけど労働者状態の歴史というか，そっちから攻めるというのは，これは経済史的なアプローチなのでちょっと面白いなと。

そのときにどうですか，クチンスキーというのは。あの翻訳で出たのは理論なんだけど，膨大な状態史というのがあって，それは今言ったようなちょっと荒唐無稽な本なんだけれども。

村串　そう，長谷川さんは，あまり理論に強くないせいもあるんだけど，非常に実証的なことを大事にする先生で，鉱山が好きで鉱山史の，例えば佐渡鉱山史の本なんか集めて勉強しているんです。論文を一つも書いてないんだけど，「村串君，佐渡は面白いよ」と言って。だから実証的な面白さを教えてくれたのは長谷川先生。

実は友子についても，長谷川先生が「君，友子の文献目録だよ」と言って，学生の頃にはカーボン紙のコピーで10ページぐらいのをもらったの。それを思い出すんだけど，私は，それですぐそのときに友子の研究に飛び付かなかったんだけど，そういう歴史的な実証主義みたいなものを非常に大事にする人で，だから長谷川ゼミには，渡辺悦次さんが学生のころに労働者階級状態論をテーマに卒論を書こうとしていたように記憶している。長谷川先生も要するに実証的な労働者階級に対する関心をもっていて，だからそういうのが私にもあって，行く行くはそういう実証的な仕事をしたいな。いや，実証的な勉強をしたいなというのがあって。だから私が高島

炭坑史の研究に向かうのは，長谷川ゼミの自然の成り行きでした。そういう雰囲気なんだよね長谷川ゼミは。

それがずっと残って大学院に入って，さてじゃあ修士論文を書く段にどうしようかと思ったときに，あまり理論的なテーマにすすめず……。結構私は理論志向なんだけど，理論的なところにいかないで労働者階級の状態を分析するのはどうやったらいいのかなと思ったら，エンゲルスがいてクチンスキーがいて……。だけどドイツ語ができないから萩原君のようにクチンスキーの膨大な原書は読めないよ。簡単なほうだけ，翻訳だけ読んだんだけど，どうもやっぱり何かうそっぽいと……。

特にクチンスキーの論証のやり方は，院生といえども相当むちゃだと感じた。そういうのがあって，じゃあ，エンゲルスはどうかって，エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』を取り上げたのです。あの頃，私のスタイルはずいぶん教条的だったから，エンゲルスに学べと，エンゲルスを修士論文にした。

それでやったんだけど，何も出てこないんだよね。少し言いすぎだけれど。それで結局，自分の学問というか，あるいは労働者を本当に分析する方法というのはエンゲルスにあるわけじゃなくて，結局『資本論』じゃないのかと。「おれは『資本論』を最初からやればいいのに，『資本論』が怖いから逃げ回っていたんだ」と反省したわけ。それで博士課程にいってすぐ『資本論』を勉強したんだ。

資本論研究は2回目ぐらいだ，これで。『研究回顧』には就職して飯を食えるようになって2回目と書いたけど，実は3回目だった。『Lage』のあとすぐ博士課程に入って1年間ぐらい『資本論』研究に没頭していた。そこで初めて私が目覚めたのは賃労働理論。増田君の奥さんのお姉さんの井村喜代子さんの「『経済学批判』プランの『賃労働』について」（『経済評論』1957年2月号所収）という論文があって，これを熟読した。私にとって，井村さんは，紙上の指導教授でした。「ああ，そうだ，おれの世界というのは賃労働論だ」と目覚めた。労働者のためのいろいろな理論の基

礎はこの賃労働論。一つは『資本論』の中の賃労働論と同時に，マルクスが書き残こせなかった賃労働理論……。

萩原　ただ，ぼくは今，飯田さんがいらっしゃるのでちょっとお聞きしたいのだけど，一緒に議論してみたいのですが，よくイギリスの産業革命論というのはトインビーから始まると言われている。トインビーの『産業革命史講義』ですか。産業革命，イギリスが工業化して資本主義が成立してくると，大陸のヨーロッパから見ると最初の工業国として目覚ましく台頭してくるわけですね。だけどエンゲルスのこの本の持っている意味というのは，しかしロンドンの，そういう先進工業国として，ヨーロッパで最初の工業国として登場したイギリスの首都の中に，これだけの労働階級の悲惨な生活があるんだということを世界に向かってちゃんとデータで示す。確かに緻密な本ではないですよね。だけど読み物としては非常に面白いことが書いてある。

産業革命の結果，労働者の状態が悪化したのか改善したのかということについての，そういう総括的な議論はしていないけれども，労働問題の発生というか，それを提起したという点で最初の本じゃないかと思ってる。だから私は産業革命論というのはトインビーから始まるというのは間違いじゃないかと。エンゲルスじゃないかと思うのですが，その辺はどうですか，飯田さん。

村串　エンゲルスがインダストリアル・レボリューションという言葉を使ったのが最初だというように言われている。違う？

飯田　経済史の分野では産業革命そのものはトインビーだと思います。エンゲルス自身は産業革命という発想はなかったんでしょうけれど，ただ既にトインビー以前に『イギリスにおける労働者階級の状態』というのを書いているわけですから，封建時代とは違う新しい時代になり，いろいろな社会問題が出てきたという意識は当然あったわけです。

ただ経済史の立場から言うと大変難しいところがありまして，ランカシャー地方の綿工業の労働者が，じゃあ，そんなに悲惨な状態に置かれてい

たかというと，いわゆる資本労働関係で割り切れないような，要するにもう徒弟的にずっと親方のところで綿工業で働いて，そのまま独立してまた徒弟を雇ってというようなケースも多いので，もう労働者階級でずっといくかというと，途中で資本家みたいになってしまう人も結構いて，しかも結構もうかる。金もうけがだんだんできてきますから，結構豊かな生活を19世紀半ばぐらいにしている。

エンゲルスが見たのは，まさに貿易が発展し，国際関係が非常に新しいものになって，ロンドンがその中心となり，そのなかでロンドンでさまざまな商業活動，金融サービスも含めていろいろな港湾，その他の事業が展開されるに至って，イギリス中から生活のあてのない人たちが集まって，いわば吹きだまりみたいな状態にあったんだろうと思うのです。だからなかなか19世紀半ばのイギリスの労働者はおしなべてひどかったとか，あるいは非常によかったとか，なかなか難しい問題ではっきりしたことは言えない。

ただエンゲルスが，先ほど言ったように既に封建社会のような状態ではなく，新しい労働者の問題，社会問題というのが出てきたという意識はあったと思いますが，産業革命という言葉はたぶん使っていないんじゃないですか。

村串　エンゲルスは使っているんだ。あとで確認して……。それは私の本を読んでいたら出てくるはずだよ。

飯田　これに出てくるんですか，この『労働者階級の状態』に。

村串　うん……。ほかの論文かな。その私の論文で指摘したはずだ。もう一度確認します。

（注，エンゲルスは，『状態』の中で「産業革命（Die industrielle Revolution）がイギリスについてもつ意義は，政治革命がフランスにたいし，哲学革命がドイツにたいしてもつ意義と同じである。」と書いている。マルエン全集第2巻大月書店版，244頁，村串）

それと，最近ここ20年ぐらい，要するにエンゲルスの再検討みたいのが

あって，イギリスの歴史学界は，エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』に非常に冷ややかだね。というのはさっき言ったように，労働者階級の状態を局部というか，そういう極端に普遍化しているという理由で。もう一つ，例の工場監督官のレポートの書き方が問題だ。あれはジェントルマン層や身分のいい人が書いているんだよ。労働者の生活を見てみんなびっくりして「ひどいー」と，極端に表現しているというのがあるんだよ。

私は，もともと貧乏人の出身だから，庶民なんて汚らしい，でもバイタリティを持って生きているとみているから，貧乏人をみてもあんまり驚かない。例えば横山源之助も書いているけど，ひと間っきりの貧民屈で貧乏人が骨の髄をズイズイ吸いながが生きているのを貧しい，ひどいーとみるか，みんな元気にやっていると見るか，なんだよ。決して栄養失調じゃないんだよね。私なども少年時代，母親が聖路加病院の掃除婦をしていたから，患者の食べ残した牛肉を家にもってくるから，それを食って育った。私は，だからそこら辺は，上から見るか，下からみるか，によって実態というものがずいぶんと違ってくると思っている。イギリスの歴史学界は非常に冷ややかだね。というのはさっき言ったように，局部というか，そういう極端に普遍化しているという説と，もう一つ，例の工場監督官というかレポートの書き方が，横山源之助の『日本の下層社会』や農商務省の『職工事情』もそうなんだけど，みんなあれは士族とか偉い人が書いているんだよ。労働者を見てみんなびっくりして「すーげー」と，極端に表現しているというのがあるんだよ。

萩原　ぼくもエンゲルスのこれ読んで，横山源之助はだいぶ後になって読んだんです。岩波文庫に入っていて非常に知名度の高い本なので期待して読んだんですが，読んだら非常にがっかりしてしまった。エンゲルスのによく似ているなと。要するにいろいろなことをごちゃごちゃ，ごちゃごちゃ書いているけど，あなたは何を言いたいのと。それが出てこないんです。

だから断片的にはエンゲルスがイギリスのスラム街はトイレがなくて，穴を掘ってそこで共同トイレにして，いっぱいになってきたらまた埋めてというような，そういうのは面白いなと思ってよく覚えていた。横山源之助はまさに同じで，あちこちのスラム街だとか紹介していますが，結局何をこの人は書きたかったのかなというと，寄せ集めにすぎないという印象はどうしてもぬぐい切れないです。

増田　でも実証研究には結構そういう物が多いよね。要するに対象自体が面白くなって。だからたぶんそれを追究していって書くんだけど，じゃあ何を言いたいのと言われても，そんなのはあまり関心ないとかね。

村串　だから資本主義は悪しということで資本主義のあらを探せばいっぱい出てくるけど，逆に資本主義よしと思えばその証拠がいっぱい出てくる。私たちは，要するに労働者は貧しいという大前提をみんな持っていたわけでしょう。ところが鉱山史の研究をしていると，実は労働者が貧しいと言い切るのはうそで，大正初期の鉱夫はビールなんか飲んでいたんだよ，高い賃金で。

だから労働者というのはいろいろあって，技術を持った労働者というのは結構普通の平の貧乏労働者よりは，はるかに高い賃金を稼いでいるわけで……。みんな結構ビールを飲んで……。

萩原　今の点，すごく面白いと思うのですが，そういう労働のルポルタ

ージュというか，エンゲルスもこれも一種のルポルタージュと考えて，見聞記というかな。確かにやや誇張して悲惨さみたいなものを描いているけど，しかし現場を見ているから，その中で紹介されている中に，あっと思うような面白いことがある。

例えば源之助もそうだしエンゲルスもそうだし，それから『あゝ野麦峠』なんかも100円女工というのが出てくる。そういう人たちは一冬で100円稼いでしまって，妹と姉の二人で200円稼いで帰ってくると，もう家が建つんだよね。そういうすごい楽しい話がちょこっちょこっと出てくるんだけど，全体としてはそういうのは忘れてしまって，女工哀史という話になるんだよね。

村串　だから『女工哀史』もそういう書き方で，だから『あゝ野麦峠』はそこら辺を補っているんだけど，『女工哀史』だってよく見ていると明治20年代と30年代，40年代とくらべると女工の生活水準が全然違うんだよ。細井和喜蔵の場合はプロレタリア・ルポライターだから，悪いほうを極端に書いているけれども……。

萩原　あなたは労働の体験が一応若い頃にあるというのは，ぼくは非常に重要だと思うんだけど，簡単には決め付けないというか，こういうもんだと紋切り型に決め付けることに対して反発する。

村串　それは全くそのとおり。というのは例えば私は幼年時代から働かされているんだよ。高校を卒業して工場へ入ったでしょう。そして1週間ぐらいで小便が真っ赤なんだよ。それで一生懸命，詩を書いて，資本主義はひどいとか労働はひどいなんて思ったら，だんだん小便が澄んできた。最初はきついに決まっているということがわかってしまう。そうすると詩が書けなくなっちゃうんだ。

だから鎌田慧の『自動車絶望工場』を読んだときに，みんな「すごいー」ってびっくりして読んでいるけど，私はそうじゃなかった。つまりインテリが半年ぐらい工場にもぐりこんで書いて，自分の小便が真っ赤になっり，労働者が重労働しているのにびっくりしているけど。それは当たり

前だよ。田舎から出てきた人は日頃からきつい労働をしているから，１日10時間や12間働いたってびくともしないんだよ。そういうギャップがわかっていない。別にそれで季節雇用がいいとか残業がいいと言っているんじゃないんだけど，絶望的労働なんてのはインテリのこけおどしだよね。インテリを脅かして，ああいうルポを書けば有名人になれちゃう。いいすぎかな。

萩原　脱線のついでに，ぼくは最近，講義の必要で細井和喜蔵の，それこそ『女工哀史』を丁寧に読んだんだけど，講義では工女結核問題というのを中心にやったので，特にそこのところを丁寧に読んだのですが，当時の産業医学をやっていた人たちがいろいろな病気を書いているんですよ，紡績業の女工さんたちの健康問題というのを。その中に胃腸病というのが出てくる。

胃腸病は何かというと，10時間ぐらいの長時間労働だから，後半でもうものすごくお腹がすいてくるわけだ。それで仕事が終わるでしょう。それから夕飯だよね，寄宿舎へ帰ってきて。むちゃくちゃ……。おかわりは自由なんだよ。だからひどいのはもう８杯とか食っちゃうんだよね。

村串　胃拡張が起こっちゃう。

萩原　それでこういう不規則なというか，生活をしているから，胃腸がこう……。そうすると会社はおかわりを自由にしていたんだなと。すごいなと思ってね。

増田　すごいね。明治時代に飯食い放題なんてね。（笑）

萩原　そう，明治時代。全然一変しちゃったよ，イメージが。（笑）

村串　そういうのも私は夜学生のときに経験している。結局外で食うと金がかかるから，家に夜12時ぐらいに帰ってブワーッと食う。そうしたらおなかにいいわけないって。慢性の胃拡張でいつも胃袋がしくしくして，青い顔していたいた。（笑）つまりそういう労働体験とか生活体験って，私は，あまり驚かないんだよ，経験的に。何かすごいことが書いてあってもね。

飯田　そういうのは労働力の再生産のために，おかわりは当然なんでしょう。(笑)

そういうルポめいた実態調査みたいなものではなくて，それには反発というか，あまりピンとこなくて，むしろアルバイトでやられた中小企業調査のようなきちんとした結果が出せる仕事をしたと。これだとある程度定性的，あるいは定量的な見方であるフォーマットが決まって，それで調査をやっていくわけですよね。そこで非常にほかのメンバーよりも自分はできてたというのですが，何かやり方というか，そういうフォーマットがもう既にあったり，あるいはそれを教えてくれる人がいたりとかあったのでしょうか。

村串　すべて自分でつくるんだよ。自分で調査計画をたてて，調査票をつくるんだよ。だからそこが面白いので，「はい，村串君，これですよ。今度のテーマは」といわれて。

増田　丸投げね。

村串　うん。丸投げ。だから最初の報告書は例えば400字の原稿用紙で50枚ぐらいでいいというのに250枚ぐらい書いて持っていったんだよ。ばかにされちゃって「村串君，こんなに持ってきてどうするんだい」と言って。「いやいや，一生懸命やったんです」「だめ，これ」と言って突きかえされる。それでそれを50枚に一生懸命圧縮した。

萩原　ぼくはあなたの，まだ一人前の研究者になる前のいわゆる徒弟時代に，どれぐらい調査を経験したかというのはかなり意味が大きいと思うんだけれども，国民経済研究協会とか東京都の市政調査会にどうやってコネをつけたんですか。

村串　だからそれは実は，私のかみさんが日本女子大の出で，女子大学のときの指導教授だった松尾均さんという先生が，国民経済研究協会の理事をやっていた。それで「じんざぶろうはどうしてる。」って，ろくに食えないらしいと仕事を紹介してくれたのがはじまりだった。国民経済研究協会から調査報告書を書く仕事をもらって……。だから一発目は苦労して

たんだけど，なんとかパスしたわけだ。じゃあ，これでというので毎年，3年間ぐらい続いたかな。

それと松尾均さんだけじゃなくて，もう1人，国民経済研究協会にいた倉野精三さんという人がいた，実は浜川浩というペンネームで有名な労働評論家なんだよ。この人が結構私をかわいがってくれた。後に彼は日本女子大の教授になったんだけど，彼に来た依頼原稿を私にまわしてくれたんだ。労働辞典やその他の調査ものを彼の名前で相当書かせてもらった。それが修行だったよね。

それとこの調査はさっきも言ったように全部自分で企画して，調査票の作成から，回収は協会がやってくれるのだけど，それの分析を全部やるわけ。そしてもう一つ大事なのはインタビューなんだよ。

増田　インタビューも自分でやったんだ。

村串　例えば八百屋さんの調査なら，メールのアンケート調査で，20－30通ぐらい回答がくる。そのうち10ケースぐらいを実際に八百屋さんに行っていろいろ聞くわけだ。営業マンみたいに，ご機嫌をとりながらね。調査経験でえたことは，実は調査表に回答することと，つまりこれは東京都の調査なので調子を合わせて書いていることと，インタビューで本音で言っていることとしばしば違うことを発見したね。そういう調査内容の信ぴょう性にかかわる矛盾をたくさん経験をしたわけだ。

つまり調査というのは実はかなりいい加減なところがあるというのを自分で経験した。でもそんなことを言ったらお金にならないから，大体スポンサーは国民経済研究協会じゃないか。国民経済と東京都が喜びそうな面白い調査結果をポンポンポンと書いて出すけど，自分では全然別な調査結果を喜んでいる。「ああ，やっぱりこうか，本当の実態は，そうなのか」，などと感じてね。いつかおれも労働評論家になったら，これをやる。こっちの本当のことをエイヤーと書く。

その頃は大体そういう労働評論家みたいなもので研究を続けようと考えていた。二足のわらじだな。昼間はどこかの労働組合で働いて，夜ペンネ

ームで本当のことを書くという。そのときそういう感覚というのを得たね。

飯田　特に労働経済学なんかをやっている研究者で社会調査をやっている人の中に，そういった調査票をつくったりアンケートのフォーマットをつくったり，そういうことを結構訓練をされている人がいて，以前法政大学の経営学部にいて今，東大社研にいるのかな，佐藤博樹さんみたいな人もそういうのをつくるのが非常にうまくて，それでそれをすぐやってしまうそうですね。そうした調査屋と呼ばれる人たちというのはやっぱり何か違いますね。

村串先生のこの原稿にも書かれていますが，東大の院生たちが指導教授や先輩のもとで，十分な資金を使った調査や共同研究で研究能力を高めてというのを横目で見ながら，というように書かれているのですが。

萩原　これはちょっと訂正したほうがいいと思うんだけど。東大の社研のこと。まず学部の教授なんていうのはできないんですよ，調査は。お金も何もないから。そうすると社研で氏原教室なんていうのができて，その労働調査だとかそういうもののフォーマットなどがもうだいぶでき上がっていた時期ですよね。そういうのもある程度参考にされたということですか。

村串　いや，全然。だから私はそういうのは一切無視して，ただ話としてはそういう話があって，だからおれも法政大学の大原社研で何かそういうことができたらいいと門をたたいたら，フンと言って断られた。

だから法政大学というのは，法政大学の院生を育てようとさらさら考えていないということをつくづく感じた……。コネで入った連中だけが大原社研で仕事をしている。おれは何もコネがないから，大学院のときは，大原社研の部屋にさえ一度も入ったことがなかった。だから少々うらみに思っていたね。院生のころは。（笑）

萩原　これね，ちょっとやっぱりあなたのほうが恵まれていたと思うのは，東大の大学院生なんかもそんなに恵まれているかというと，ほとんど

調査なんか参加できないですよ。要するに社研の所長とか教授が，個人的なコネで神奈川県とか東京都から調査を委託されて，それもたくさん持ってこれる人は１人か２人しかいないんだよ。その人が自分１人で調査をやれないから大学院生を使ってやると。それに恵まれた……。

みんなが恵まれているかというと，実際東大だけですよね。それがある程度，東大の先生には少しは委託が来るので。だけどそれはこんなにたくさんは来ないですよ。東京都や国民経済研究協会がかなりボンボン出すわけでしょう。これは東京都だけじゃないですよ。これはかなり，ぼくもよく知っているけど。大阪だとかいろいろなところでも，大きい調査をやっているんだから。いいコネを見つけたなと思うね，その松尾均さんのコネさ……。

村串　だからかみさんに頭が上がらない。感謝している。それから均さんに途中で随分嫌な思いをさせられたこともあったけど，やっぱり均さんのおかげだと思っている。死んじゃったけどね。偶然なんだよな。余談だけれど，余談をやっているからいいか。私が院生のころ，さきほど紹介した大羽圭介君と，ばったり上野駅であった。彼がいきなり，「村串君，２部の資本論研究会のチューターをやってくれないか」と頼まれて，少しお金を貰えるというので，引き受けたわけだよ。そこに今のかみさんがいた。彼女は，松尾均さんのところでは経済学が勉強できないから，均さんの友人だった上杉捨彦先生のところに行きなさいと均さんにいわれて経済学部２部に学士入学してきていた。『資本論』で結ばれたわけです。大羽君が恋のキューピットだったわけだ。

増田　これだけできたというのはね。だけどこの時期に同時に彼は理論志向が強いので感心する。両方やっているんだから。

村串　それをやりながら，しかも子供を抱きながら原稿を書いていたんだよ。

増田　やっぱりその時期が一番充実してたんだろうな。必死だもんね。

村串　かみさんも修士課程にいたんだが，子供ができてしまったし，二

人で勉強なんてできないからかみさんに博士課程の進学をあきらめさせてね，ちょっとつらかったな。でもかみさんは，表つくりとか，きたない原稿の清書やゲラの校正をやってくれた。大いに私を支えてくれてね。五味健吉さんがいつも言っていた，「むらちゃんはいいな，田中キヌエさんが助けてくれて」って。

それにいわゆるフロント系の活動の付き合いが並行しているわけだから。こっちもやらないと，こちらからも仕事が来ないといけないから，だから両方一生懸命……。

増田　切っちゃうとまずいという気持ちも強くあって。

飯田　その頃の調査のアルバイトで「積雪の新潟経済に与える影響」と。これは何ですか。

村串　これはおそらく通産省か企画庁かの仕事だった……。これも東京都と同じように毎年やっているんだよ。これは新潟大学短期大学部の教授になっていた先輩の松島春海さんが，貧乏でこまっていた私に自分のところにきた委託調査をまわしてくれたんだ。それは，私の記憶だと600万円ぐらいの予算なんだけれど，新潟大学に下りてきたときは60万に減っていて……。松島さんが「村串君，600万ぐらいの予算なんだけど，君には20万しか払えないよ」と言われて。「えーっ，剰余価値率3000%，すげえー」とかと言って驚いた。（笑）それでもあの頃20万円というと4ヶ月分以上の生活費だったので，すごく助かりました。

その時初めて痔を体験したんだ。1ヶ月ほど寒い冬の新潟で調査していたから，それに酒をのみすぎて。大学のトイレに行って座ったら，タラタラッと鮮血が出て，「あっ，おれは初潮を見たか」と思ったが，（笑）「ああ，おれは男だった」と気がついて，ばかばかしい……。そのときにひと月ぐらいで20万ぐらい稼せがせてもらったいうことは有り難かった。だからこれも松島さんにすごく感謝しているんだよ。長谷川ゼミということでみんな助けてくれたということね。

長谷川ゼミということでみんな助け合って……。助けてくれたというか

ね。

萩原　これは長谷川ゼミの人？　松島春海さん。

村串　春海さんです。当時社会学部から東大大学院へ行った唯一の人で。

萩原　飯田君もそうだけど。

村串　大学院？

飯田　私は東大の大学院へは行ってません。助手で社研に行ったんです。

とにかく中小企業調査だったら何となくイメージはつかめるんだけど，積雪の調査って何ですか。

増田　調査屋というのはやっぱり何でもこなさなきゃだめなんだよ。

村串　それで結構，相手からこれは面白いとほめられた。要するに雪が降ると経済にマイナス効果を与えるでしょう，マイナスコストを大雑把に推計するんだ，そして，補助金で何とかカバーしようというわけです……。だからこうした仕事を私は一時非常に嫌になったことがあった，お客さんの気持ちをくんで，お客さんが何を求めているかに答えるようなレポートばかり書いているんだよ。それも技術の一つなんだが。ご用学者の気持ちがよくわかる。というようなことでなんでもやっちゃう。だってその頃，食えないんだから仕事があるといったら何でもやりますと言って。

『現代の理論』の論客としてデビュー

萩原　それで博士論文だな。ドクター修了論文は……。

飯田　いや，その前に「労働者階級の限界規定について」ということで，これをベースに「現代の理論」にいくつかの論説を発表されてますね。

村串　『現代の理論』とのかかわりでいうと，調査報告書作りが実質的に私の分析力とか調査能力とかという，目に見えない研究経験として研究に役に立つものだったとすると，『現代の理論』で論文を書かせてもらっ

たということは，やはり読み手を意識して論文を書いてどういう反応が出るのかということで，私の研究にとってすごく役立った。これは学会の世界とはちょっと違うのだけれど，そういう経験としてはすごく役に立った，おそらくこういう経験がなかったら今の私はないと思っているんだ。

そのまず「現代資本主義社会における労働者階級とは何か」という最初の論文なんだけど，これは私の研究を前に押してくれた。これもだから編集長の安東仁兵衛さんにとても感謝しているね。

飯田　これは井汲さんや長洲さんに見てもらったらとても面白いというので掲載され，いくつか追加したという話ですが，この人たちはいわゆる構造改革派ですよね。それに乗っかったということですか。

村串　そう，乗れたというかね。

萩原　構改派の論客になっていく。

飯田　それは既に卒業論文のときに，山田盛太郎が結構，権威はあるけれどいいかげんなことをやっている。だからそういう権威だけじゃなくて，やはり現実を見なくちゃという発想なり態度と，あるいは党にもう依存はできないという気持ちになって，構造改革派の人たちとの考え方との波長が合ったというようなことなんですかね。

村串　結局このときの課題というのは，長洲さんたちが現代マルクス主義派というのを旗揚げしてやっていた。私もマルクス主義者を自任して古いマルクス主義者をどうやって撃破するか，新しいマルクス主義をどう構築するかを考えていたから，うしろから付いていった……。当時それを現マル派と言っていたね。その中で自分が持っていた教条主義とか何とか硬直的な考え方というのと闘いながら，どうやってマルクス主義を有効なものに再生するかという，そういう試みの流れの中に私は身をおいていたのですよ。

萩原　マルクスは，こういういわゆるホワイトカラーとか職員層というのをほとんど検討していない。20世紀になって官僚機構だとか企業も大きくなってきてホワイトカラー層というのが肥大化してくる，ところがマル

クス主義のほうはあまりそれに正面から取り組まないで，アメリカ社会学だよね，取り組んだのは。ライト・ミルズの『ホワイト・カラー』とか『パワーエリート』とかね。せいぜいマルクス主義にある中間層論というのは，旧中間層だよね，農民とか自営業者とか。それで会社のサラリーマンのことは全然無視する。ところがそれが非常に大きくなってきている。だからその研究に取り組むだけでも新しいんだよ。

村串　古い人たちというのは工場労働者しか労働者ではいないと思っているから。

萩原　ブルーカラーね。

村串　うん。マルクス主義を自認する人たちに，ブルーカラーしか労働者じゃないと思っている人が多くてね，世界的な雑誌で，マルクス主義者のそういう古い論文を読むわけだ。あの頃何ていう雑誌だったかな。特にフランスのマルクス主義者って本当にひどいんだよ，もう肉体労働者しか労働者じゃないとか，プロレタリアじゃないとかって言っている。そんなばかな議論はないだろうと反発していたね。

それから社会学連中の中間層を固定的に捉えるというか，絶対視するというか，そういう傾向にも反対したわけです。マルクス主義者として，そういう間違った傾向を克服する，中間層を労働者階級として抱え込んでいこうという立論でした。

萩原　これは結局どういう方向で大体まとまって……。つまり旧中間層についてはマルクス主義は基本的に没落すると。それに対してベルンシュタインたちは，いや，そんなに簡単に没落しませんよという修正主義が出てくるのだけど，それは旧中間層の話で，新中間層は結局，簡単に言えば賃金労働者の一種類と見なすか，それとも中間層と見なすか，どっちかだというので，あまりみんなまじめに検討していなかったわけだな。結論はやっぱり労働者だと，ホワイトカラーも。

村串　私の立論には革命戦略がいつもあるから。つまり労働者階級を統一的にとらえ，そうやって一緒に革命を起こさないでどうやってやるんだ

という，そういう発想でね。だから革命戦略の上からも彼らをプロレタリアートに位置付けて，有力な部隊として考えた。

特に公務員や教員のホワイトカラーなんか実際強力な労働組合運動をやっているんだから，あれは労働者階級じゃないなんていう馬鹿なことを言ったって……。フランスではそう言っているんだ。日本だとそんなこと言う人は少ないんだけど，理論的に詰めていくとあれは労働者じゃないという理論家や学者がいましたね。

萩原　日本でもあるよ，そういう言い方。あったよ，少なくとも。中間層であるというね。ホワイトカラーは中間層だから，要するに労働者ではないというように……。

村串　グラムシの影響もそろそろ私も受けてきているから，例のヘゲモニー論から言ったって，私の立論のほうが正しい……。だって，「おまえら，労働者じゃないよ」と言ったら，本人たちは，「じゃあ，おまえらと一緒にやれないよ」と，いうことになっちゃう。

萩原　ただ，それは労働運動のほうもぼくは実際多少タッチしていたから知っているけど，総評が組織綱領草案というのをつくるときに，氏原さんだとか藤田若雄さんとかいろいろな人が協力したんだけど，氏原さんたちは総評の本部に職員部とか職員局というのが，要するにホワイトカラーの運動を組織していく部門というのをちゃんときちっとつくらなければだめだと言っていた。

ドイツの労働運動というのは三つになっているわけだね。いわゆるブルーカラーと職員層と公務員というか。その三つが労働団体をつくっているのでみんな労働者なんだけど，意識だとかが違うから同じように運動をやれというのは無理，むちゃだよね。乱暴すぎる。だから職員局というのをつくれと，総評も。それでホワイトカラー層特有の要求というのをちゃんとくみ上げてあげなければいけないということを提起したんだけれども，結局だめだったんです。組織綱領草案は採択されなかった。だから村串さんはそれに近いわけだよな。

飯田　構造改革派とのかかわり合いなんですが，既にこの時期，今井則義さんとか森川英正さんとか，法政大学の専任でいろいろ活躍もされてた方もおられたと思いますが，そういう方々と接点はなかったんですか。

村串　私は一応構造改革派だったけれど，あまり研究会が好きじゃないんだよ。それであの頃，日本経済分析研究会というのがあって，正村公宏さんなどを大将に長洲一二さんとか富塚文太郎さん，竹中一雄さんとか，時々，佐藤昇とか，みんな出てきて，今井さんも出てきて報告をしたりしていたんだけど，私は労働のほうだから日本経済分析研究会にはあまり出席していなかった。食うのに忙しいというか……。(笑)

一度，おまえ報告しろというので報告したけれど，たいした反響はなかったな。最後に飲みに行こうなんて言われて困った……。

増田　困るよな。金ないものな。

村串　そのときに覚えたのは出世払い。「村串君，出世払いだよ，君が稼げるようになったら後輩に払ってやればいいんだから」といわれて，いそいそとみんなに付いていって，ただ酒をのませてもらった。だから私は今，学生の飲み代をみんな払っちゃう。

増田　出してくれたの。

村串　うん。会計のときに「はい，村串君は失業者だから，払わなくていいよ」って。だからそのときのことも感謝して……。

飯田　そういう接点はあったんですね。

村串　でも今井さんとは直接話をした記憶がない。森川さんもちょうど私が経済学部に入ってから，話をするようになったように思う。森川さんは松島さんとは東大の大学院で一緒だったから親しかったの，松島さんの後輩として，森川さんに親近感をもっていました。大学院時代に，今井さんや森川さんに就職お願いするようなことは一切なかった。

だから笑っちゃう話があるんだ。私が法政の経済学部の助手に合格したのは今井さんの力に決まっていると思っている人がいて，「今井さんにまだあいさつに行っていないようだから，君，行ってきなさいよ」と言われ

たことがあった。何言ってるんだ。「経済学部が勝手におれを採用したんですよ，今井さんとはいっさい関係はありませんよ」と言ってやったら「えーっ」とかと言って驚いていた。

萩原　ここまでは大体うまくいってきてるんだよ。変な方向へ行かなくて，いい線でずっと来ているんだよ，これまでは。これからが……。(笑)せっかくみんないい線で，ホワイトカラー論だって早くから取り上げて，いい線というか……。間違っていないんだから。

増田　そうだよ。結構いい視点をいっぱい持っているんだよ。どこからか，はずれたかもしれない。

萩原　どこかからこういう『賃労働原論』などという変な本を書くようになったのかなあ。

(暫時休憩)

理論家をめざしたが，やっぱりオレは…

飯田　卒論の高島炭坑の労務管理近代化過程の内容を法政の短大の紀要に活字化されて，先ほどは大体，卒論をほぼそのままみたいな面もある話だし，ここに書かれているところでは調査報告書の作成で鍛えた分析力と筆力で一気に書き直しされたと。

しかし，この論文が認められて特別助手となったわけですね。そこで第3回目ですか，『資本論』を改めて勉強されて，それで「賃労働理論」，後に『賃労働原論』となっていく成果ということですが，結局そういう際の，先ほど話題になった新中間層論とか，そういうのを先ほどの話ではそれも含めてすべて労働者全体として革命勢力としてというような発想が当初はおありになったのが，多少変わってきたというようになりますか。

村串　いや，そうではなくて，当時の私は，そういう労働の諸問題，あるいは歴史問題を理論的に把握する打ち出の小槌が『資本論』の中に詰まっていると考えていた。

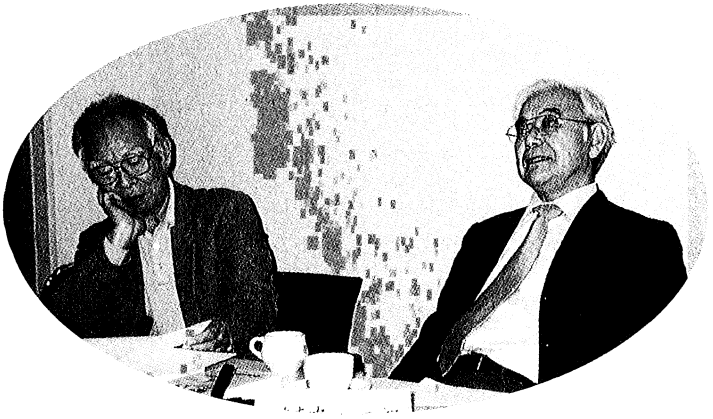
しかし，『資本論』を引用して労働問題の理論家みたいな顔をしているのは間違いで，マルクスが『資本論』のあとに残した理論というのはたくさんあるんだけど，それを研究し，あるいは構築しないでは，現代の諸問題を理論的に把握できない。要するに『資本論』をしっかり把握し，『資本論』以外に残されたマルクスの賃労働理論，例えば階級闘争論なんていうのをマルクスに則して理論化しなくては，現代の諸問題を理論的に正しく把握できないと考えていた。それを自分で構築しようと決意したわけだ。そのためにはまず『資本論』をしっかり勉強しようということで，勉強を始めたわけだね。就職できてやっと飯が食えるようになったので，落ち着いて勉強できるようになった，そういうことだね。

萩原　ということは一応生活の基盤が安定したから，今まではあまり集中的にやれなかった『資本論』をちゃんときちっと読んで，理論をやっていこうということなんですね。

増田　村串氏が前に『現代の理論』に書いて，『経済志林』では初めてかもしれないけれど，「欲望論」についての論文というのは結構面白いのだが，今回の回顧の彼の自己規定によると，これで唯物史観をどうも嫌いになったというか，どうも経済決定論ではないと，考えるようになったということみたいだが，「欲望論」を全面的に展開すればもちろんそうなるのだろうけど。村串さんの今現在も残っているのかもしれないけれど，マルクス教条主義と非常に柔軟性とのギャップみたいなものというのがずっと続くじゃない，長々と。

勉強しているプロセスの中で，どっちかというとニッチの部分みたいなのがいっぱい入ってくるんだよね。欲望だとか，それから闘争論。グラムシの影響もあるのかもしれない。そういうのを全部入れようというようになったときに，なかなか理論は完結しないから，そうすると一体何をやるかというと……。

そのあと，社会政策が出てくるでしょう。社会政策を勉強していると今度は国家論が出てくる。そうするとまた国家を書くんだよね。



村串　マルクス国家論を１冊書きたかったけど，ついに書けなかったんですよ。

増田　だからみんな普通の人がちょっと怖くてなかなか取っ付かないようなところを結構，かなり勉強するんだよね。

萩原　その前にちょっとお聞きしたいんですが，労働問題の研究とか労働分野の研究で，あなたはほとんど無関心だと思うけど，全体のアカデミズムの中でいうと，いくつかスクールがあるわけね。一つはアメリカ制度学派というようなすごいものがあるんです。もう一つはイギリスのフェビアン・ソーシャリズムのウェッブからコール等がある。それでもう一つは一応マルクス主義というのがある。

その中でぼくなんかは三つちゃんとやらなきゃいけないと思って，まず制度学派からやって，三つとも全部やりました，かなり大変ですけど。大体マルクス，『資本論』は労働問題の研究にはあまり役立たないというのがぼくの大学院が終わる頃の結論で，例えば資本蓄積論で相対的過剰人口の累積的増大とか，絶対的窮乏化論に結果なっていくような，これはとてもじゃないけど理論としてはまともに付き合いきれないなという感じだったんです。

だから一応マルクス経済学をぼくは支持していたけど，『資本論』はか

なり懐疑的だった。その辺どうですか。

村串　あなたは早熟だから，それで早く『資本論』を見切ったんだけど，少なくともというのはおかしいけど，私はもう根っからのマルクス主義者を自任し，いかがわしいマルクス研究者にはなりたくないと思っていて，だから『資本論』に対するこよない期待を持っていた。

すでに『資本論』を本格的に研究し始める前にかなり『資本論』に批判的な意見とか『資本論』を批判する本とかそれなりに勉強していて，『資本論』についての不安を抱いていたことは事実です。しかし私は，本当に『資本論』は破たんしているのか，問題はどこにあるのか，十分再生可能性があるのかなどについて，自分で確かめなければいけないと考えていた。人の尻馬に乗って『資本論』はだめだとか，マルクスはだめだと言うのは，いやで，あくまで自分で確かめたかった。

だから宇野さんの本を読んだときに，「おおー」とうなって，ひと月ぐらい彼の本を読み漁って，宇野理論で頭がいっぱいになり，マルクスを超えるのはこういう理論かなと思った。しかし少し頭を冷やしてよくよく考えてみると，それはあくまで一つの意見であって，しかも宇野さんは『資本論』をしっかり読んだほうだろうけど，「おれなんかろくに読んでいないんだから，読んでないやつが，あれはおかしいといわれて，唯諾々と追従したんでは本当に劣等児になってしまう，やっぱりちゃんと自分で確かめよう」と決意したんだ。これが私の『資本論』研究の出発点です。

何回か読んだけど，読んで，それでちゃんと自分で読んだ結果を示さなきゃいけない。そのためにはちゃんと本を書き残す。書き残して，おれはこういうふうに『資本論』を理解しているんだという客観的な物を出さなきゃいけないというのが私のスタイルです。

『資本論』についていろいろいっている人がたくさんいるでしょう。『資本論』を相当読んだり，『資本論』を読んだような顔をしている人はいるんだけど，読んだような顔をしているといったって，その人が本当にどういう『資本論』の理解をしているかわからないじゃないか。そもそも労働

力の価値論にしたって，労働価値論にしたって，平均利潤率の低下傾向にしたって，意見を実際に書かなければその人の意見がわからないじゃない。だから自分で１回確かめて書く。

しかもその確かめる方法というのは，マルクス主義者を自認していていたから，あくまでほぼ全面的にマルクスを肯定して読むんだという読み方でね。それはおかしいと言えばおかしいんだけど，あえておれはこれを全面的に正しいというようにして，マルクスになったつもりで理解しようとした。それがあの本，つまり『賃労働原論』なんだよ。

ただ，そうやってみたのはいいけど，やっぱりおかしいところが噴出するわけだよ。一番面白いのはいつも問題になっている窮乏化理論で，どう見たって，みんなギャアギャア批判しているけど，批判のほうが当たっていて，あの理論のどうしようもない矛盾と混乱とを弁護しきれなかった。その混乱したものをマルクス流にうまく理解してみようと思って，ああやって書いているんだけど，誰が見たって問題は解決できていないわけだよね。でもこれが最大のおれの理解度だなというのを出した。マルクスの『資本論』の全部細かい部分，例えば労働価値論とか，そのほか労働力商品論とか，それもマルクスと少し違うかもしれないけど，こういうふうに理解したほうがいいなというような程度の，要するに自分流の解釈を出してみた。

しかし一番のつまずきは，やっぱり窮乏化理論だよね。私は，萩原君の言うように労働価値説までは批判し，否定できない。いまだに「労働価値説はあれでいいんじゃないの」とか，それから「労働力価値論，あるいは労働力商品論も，ちょっとおかしいかなと思うけど，あれでいいんじゃない……」と思っている。

だって宇野の理論でいう労働力は本来の商品ではないといったって，本来の商品じゃないものはたくさんあるので，労働力だけではない。だから労働力の商品化論というのは，私は，あれはいわゆる賃貸論で，労働力賃貸論で説けばすっきりすると考えたわけです。労働力賃貸論はもうローマ

時代からあった。要するに雇用というのは労働力の賃貸論で攻めればいいので，それを『資本論』の段階ではあえて労働力の商品化として論じているけど，それは形式的にはフィクションだというのも一理あるよね。

ローマ法では雇用は，労働力の貸し借りなんですよ。商品でないものを商品のように扱っているというだけで，本当は物の貸し借り，労働力の貸し借りだと。人格を持った労働力の貸し借りというのが雇用なんだということで……。『賃労働原論』では，あまり積極的に労働力賃貸論というのは出していないんだけど，講義のときには，私は専ら雇用＝労働力の賃貸論でやっています。

今は，全体として『資本論』は，もう私の手には追えないと思っている。結局『賃労働原論』の続編を書いていこうという構想も，あれを書いたら挫折しちゃったというのが事実だよ。定年退職するので，研究室を整理していたとき，実は400字1200枚近い「『資本論』第2巻，第3巻における賃労働理論」という原稿を捨ててしまった。(笑)

増田　そんなの書いたの？

村串　いや，ちゃんと完成していたんだ。もう発表する勇気はなくなっちゃってそのままに眠ってた。マルクスじゃないから，死んだあとに「遺稿」が公表される恐れはないからね。

萩原　『資本論』で論じられている賃労働に関する規定を一応祖述するというか，それで『賃労働原論』という本が出たわけだけど，一応それを踏まえてマルクスの賃労働の理論というのは何が問題かを問題にしたい。ここで問題になっているのは，一つは『資本論』は経済決定論だ。ところが『賃金，価格，利潤』というのは，賃金というのは階級間の力関係で決まると。要するに資本主義の分配構造というのは階級間の力関係が影響してくるというんですが，それは政治学的なんだよね。

『資本論』は経済学的な分配論でリカードと非常に近い。『賃金，価格，利潤』という，ああいうマルクスがアジテーションをやるときは頑張れとか言うわけです。その後ずっと学問の流れからいっても，高田保馬なんか

は力関係論でいうように，分配は階級の力関係の影響が大きいとか。一つはそういう意味で『資本論』の限界というか。

あなたの「欲望論」というのもかかわってくると思うんだけど，労働者階級が『資本論』でいっているとしたら，どういう欲望をもって形成されたかという，欲求だよな。それによってつまり労働者階級というものの存在形態が違ってくるわけだから。そうするとこれは経済学からだいぶはみ出るわけだよね。それを言っていたのかなという……。要するに唯物史観を乗り越えなきゃいけないということでね。

村串　もともと私は社会学部出身だから，やっぱり運動論が主なんだよ。でも経済学部に入って経済主義に浸っていた。それでやっぱりおかしいと。学生運動やっているときもそうなんだけど，学生仲間と議論していると，みんなすごい経済決定論なんだよ。共産党綱領論争でもそうだし，非常に経済決定論というのがはびこっている。それからもう世の中全部，唯物史観で，何かひとりでに社会が社会主義にいくような理論がもうはびこっているわけでしょう。

『資本論』を読んでいたけど，初期マルクスも並行して読んでたんだ。『資本論』のそういう経済決定論的なものに対して，マルクスの初期の理論を読むと，あまり経済決定論ではない。非常にマルクスを弁護的に解釈すれば，経済決定論というのはマルクスの理論の展開の中段，途中までであって，必ずこれは反省規定が入ってくるんだという理解なんだよ，私のは。だからポリティカル・エコノミーであらねばならないんだ。

だから経済決定論的なものが最初に『資本論』にあったとしても，必ずそれを否定する論理が出てくる。それは基本的には国家論で出てくる。あるいは賃労働理論の階級闘争論で出てきて，そこで今までの経済決定論みたいなものは修正されるんだという，私はそういう大ざっぱな理解があった。

しかも私が「欲望論」にいくというのは，要するに労働力商品論の価値規定論なんです。あれは賃金論研究者がみんなあそこでぶつかって，いろ

いろ解釈で混乱している。大学院の博士課程のときの指導教授だった上杉捨彦さんのゼミで，労働力価値論のところの「欲望論」を報告をしたら，「そうなんだよ，君。これ一番問題なんだよ」と言ってくれた。ゴリゴリの唯物論者である思っていた上杉先生に，最初「君，ばかなことを言うんじゃないよ」とどやされるんじゃないかと思ったんだけど。そうしたら「いや，なかなか興味ある問題だから，研究しなさい」と。

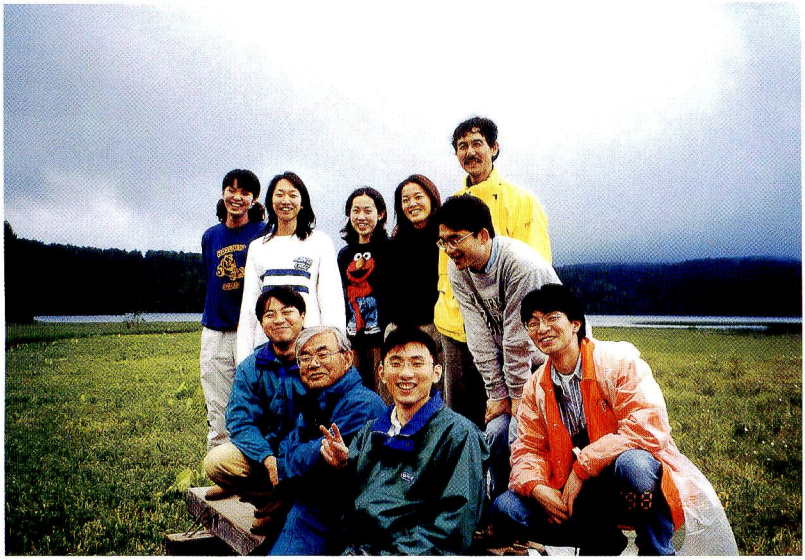
それはそうなんだよ。賃金論で，もうみんなガンガン論争していた，その「欲望」の解釈をめぐって。「ああ，そうか。じゃあ，ここで一つ今までのいろいろな経済決定主義みたいなものに悩んでいたのを，この欲望論研究で少し確かめてみよう」というので，マルクスの「欲望論」研究が始まったわけ。

これまた笑っちゃうんだけど，助手から講師になるときのプロモーションの論文にあれの元原稿を提出したんだよ。そうしたら注がない個所があったり，誤字があったり，いろいろ大失態をやるんだけど，大島清先生から「村串君，欲望というのはね，経済学の対象じゃないんだから，よく五味君に教わって，ああいうことを書いちゃだめだよ」と言われたんだ。

なんてこの人は不勉強な人だろうと思った。（笑）おれは『資本論』に書いてあることを問題にしているのに，大島先生は，農業論だから労働力の価値を論じたことがないからかしらんが，『資本論』のいわば労働力価値論の中の欲望論を冒瀆するような発言をしたので，「ああ，この先生は『資本論』をほんとうに読んだことあるのか」と思って，それで逆に勇気がわいてあれを『経済志林』に載せたんだ。嫌がらせでね。馬鹿もんと。

それでその論文のポイントは，初期マルクスからヘーゲルをちらっと見つつ，つまり人間の生活，あるいは経済関係の中で欲望をどう位置付けるかというので，マルクスも悪戦苦闘していて，結論的に言えば欲望というものを非常に重要視した。価値論でもそうなんだけど，いわゆる「社会的必要労働」の理解にこの欲望が係ってくる。

萩原　労働力価値の歴史的，文化的，諸条件というので……。



自然保護のための尾瀬調査のメンバー（1997年夏）

富士セミナーハウスでの村串ゼミ合宿（1994年）

村串　あれは労働力価値論ね。そうじゃなくて価値論の中にも，「社会的必要労働」の理解に欲望を入れて理解しようとする白杉正一郎の理論があるんだよ。マルクスはちゃんと欲望論をしっかり『資本論』だと位置付けているんじゃないかと思ったが……。しかしマルクスもちょっと曖昧なんだ。それをどうやって読むかといろいろ研究した。

商品とは，「人間の何らかの欲望をみたすものでなければならない」という『資本論』の規定があるでしょう。商品論にすでに欲望論がでてくる。それで，まあやってみようというのであちこちマルクスが論じた欲望論のあれこれ，いろいろ調べて書いたんだよ。

しかし，これを唯物論と比較していったらどうなるのかといったときに……。あの頃，増田君に「おい，唯物史観っておかしいよな」と疑問を呈したら，「どこがおかしいの。おかしいとこないよ」と一蹴されて，私も「いや，そうじゃなくて……」と言ったんだけど，全然説得力がなくて終わっちゃったんだけど……。

マルクスもやっぱり欲望論をあれだけ高く持ち上げておいて唯物論なんだよ。おかしいじゃないか。それで一生懸命，逃げ道を探してグラムシに行ったり，一番の逃げ道は実践の哲学派というマルクス研究の一派があって，名前が出てこないけど竹内何とかね……竹内良知，坂本賢三ね。それとか構造改革派にたくさんいたんだよ，実践の哲学派は。人間の生活で実践ということを重視する。たんに経済関係を重視するのではなくて実践を重視する。私はその背後に，行動を後ろから突き動かす意志の内的衝動，インパクトの欲望を問題にした。

グラムシもやや実践の哲学なんだけど，どうもグラムシを読んでもそこのところはやっぱり納得できない。グラムシは，おれは唯物論だといっているわけだよ。でも言っていることは観念論で，例えば芝田進午さんが「グラムシのあれは観念論だ」といって批判するんだよね。「そうか。グラムシは観念論か……」。そうするとここは観念論で，ここは唯物論で，使い分けみたいになるので，私のグラムシ理解は，グラムシにも納得できな

いというところで終わっているんだ。今にして思うとやはりそれは両方大事なのであって……。

私が第3の史観と言っているのは，そういうような唯物論でもあり，観念論でもある。あるいは唯物論でもなく，観念論でもない。両方なんだという……。実際たくさん唯物論を批判している人はいるわけだよ。そういう人たちの本を読んでいると，しかし明確にしないんだよね。例えば，フーコーにしろ，吉本隆明などね。マルクスを利用するだけ利用して，批判するだけ批判して，それでつぎになにも明確にしていない。そういうところで終わったわけだ。

あとの私の国家論も曖昧に終わってしまった。

萩原　その賃労働理論を終わるにあたって，もう一つの点は社会政策論。社会政策論は，社会政策の主体というのは政府というか国家だから，そうすると国家をどういうふうに位置付けるかという，労働問題の研究のなかでね。中西洋さんはヘーゲルを使って，ブルジョア社会と国家というのは一体のものとしてとらえなきゃいけないということで言っていたんだけど，今の普通の平たい言葉で言うと労働市場というのはそれ自身だと成立しないんだと。だから国家の公共政策というのに支えられて，労働市場というのは一応円滑に機能していく。

だから国家抜きに，例えば一番いい例は失業保険だけれども，失業期間中の労働者の生活をどうやって保障するか考えないと，労働市場は動かないわけだよね。失業したら死んじゃうなんていうんだったら。そうすると何らかのかたちで社会保障的なものがないと資本主義は……。初期は熟練工組合が自分で共済組合でやるとかね。しかし，それはごく一部で，全体としては国家が社会保険を導入してくるということになる。そうするとまた唯物史観がグラグラしてくるわけだ。結論はそうですか。

村串　国家論を研究したら，いよいよ唯物史観の一面性とぶつかって，なぜマルクスは唯物史観を強調するのか，疑問が深まってしまった……。マルクスは，国家論が大事だといい，いわば経済主義を国家論のところで

修正し克服して，つまり上部構造としての国家の役割を強調しようとしているのに，なぜ唯物史観を固執するのか，よくわからない。

萩原　上部構造なんて単純な位置付けにしてしまったわけだよね。

村串　そう。上と下の関係でね。あくまで土台が大事だなという……。大事だったら国家も大事じゃないか。ところが，そういう矛盾は結局いまだに理解できないんだよ。マルクスがなぜ唯物史観にこだわったかというのがよくわからない。でも彼の理論は唯物論であるべきはずがない，彼の全体の思想を見ていると。

レーニンも同じで，彼が「革命的理論なしに革命なし」というとき，革命の物質条件が生み出されても，革命的理論で武装した前衛党がいなければ，革命は成功しないという理論でしょう，これがどうして唯物論なんだか，真剣に疑問を感じてしまうわけですよ。

というようなことで，初期のマルクスは第3の史観と，どこかで言っていたように記憶しているんだけど，どこに書いていたか今はわからなくなってしまった。でも私は，やっぱりその第3の史観を主張したい……。ほかの人もみんなそうなんだと思うよ。しかし公然とそう主張しないんだ。なぜマルクスの唯物史観という言い方が間違っていると言わないのか，理解できないんだよ。そこで私は，はい，もうごめんなさいと謝ったんだよ(笑)

友子研究のはじまり

飯田　そこでマルクス主義に対する不信感なんてもつようになってきて，他方で『資本論』以降に残こされた賃労働理論を考える上で，まず賃労働のあり方，歴史だとか現実の研究を行おうということで，ここでまた高島炭坑が復活をしてきて，それをベースに炭坑労働を再びテーマとして取上げる。もう一つは電機産業を対象とするようになりますね。

村串　実証研究を自分の生涯の課題に移そうと決心した。その一つのスタートに今まで書いた炭坑労働史，納屋制度，飯場制度の論文を1冊にま

とめたわけです，その次は……。いろいろあったんだよ，あの頃ね。私は全共闘の影響でラジカルになっていて，日本の革命的労働運動史をしっかり抑えてやろうといって研究を始めたんだけど，なんかだんだん元気がなくなっちゃって……。(笑)

萩原　藤田若雄さんとかね，誓約集団論とかね。

村串　もうあれはだめに……。結局，穏健でも労資関係をしっかり見ようと思ったときに「ああ，そうだよ。長谷川先生が，友子って言ってた」と。それで長谷川さんの文献リストを思い出して取り出してきて，「うわー，やっぱりこれはすごい」というので友子研究に入った。そうしたら結構面白そうなので，それ以後友子研究に20年間没頭してしまった。途中で「あれ面白いね」と激励されることしきりでありました……。

増田　あまりやっている人，いなかった。

村串　いないよ。『友子の社会学的考察』を書いた松島静雄さんと，もう1人反共連盟の労働者上がりの左合藤三郎さんという少し偏屈なおじさんがいて，その偏屈なおじさんと仲良しになって，一緒に研究した。

萩原　ぼくはあなたのこの友子研究というのがすごく面白かったのは，明治以降の日本の労働史の一番通説的な理解は，日本では初期の資本主義がゆっくりゆっくり発展してこなかったので，後発資本主義国で急速に進んだ生産方式を取り入れてやったために，熟練工の労働市場が形成されなかった。したがって職種別の熟練工組合というのがついに形成されなかったというのが一般的な理解なんだけれども……。

ぼくもずっとそれは基本的に正しいと思ってきていたんだけど，その後，旋盤工，機械工の労働市場なんかを調べていたら，そんなことないんじゃないかなと。ちょっと氏原先生がまだ元気だった頃，その話を先生の意見はどうですかと聞いたことがあるんですが，君ね，労働組合なんて名乗ってないけどね，建設関係なんていうのはいっぱいそういう組織があって，技術者だとかいろいろなのがね。そういうのを労働組合と呼ぶか呼ばないかの話の違いなんだとかというのを聞いて，ちょっとびっくりしたん

だけれど……。

そうするとまさに友子なんて職種別のそういう全国的な労働市場があって，それを共済的に支えていく，クラフト・ユニオンの初期の形態みたいな……。すごいなと思ったんですけど。

村串　私の本を批評してくれた明治大学助教授だった東條由紀彦君に，友子をクラフト・ユニオンと規定すべきだと批判されたが，嫌だと言ってるんだ。もっとも私は，最初の友子についての報告では，「友子についての考察―労働組合史の面から」（『金属鉱山研究会報』第21号）の報告では，友子のクラフト・ユニオン的性格という面を強調していたんだが，研究がすすむと，いやクラフト・ユニオン的と言っちゃいけないとわかった。私にも労働組合のイメージがあるから，友子はクラフト・ユニオン的な傾向が少しある……という程度の理解にとどめたわけだ。そんな変な組織ができあがっちゃうということを問題にしているのでね。だから理論家だと，友子はクラフト・ユニオンと規定しちゃうわけだ。

萩原　二村さんたちがというか，普通の労働史の人がクラフト・ユニオンと言っている場合は，何かイギリス機械工組合という，もう典型的なケースで論じるから，あんなのはむしろイギリスでも例外ですよ，あんな見事に共済をやっているなんて。だからもっと緩やかなのがあるんだから。

村串　今にして思うと東條由紀彦君の言うの少しわかる。最初から友子＝クラフト・ユニオン論でやってもそれはそれでよかったかなという気はするんだけど，やっぱりそう規定しなかった以上ね，途中で変更するわけにもいかないから……。クラフト・ユニオンじゃないとまだ言っているんだけど……。（笑）まあ，それはそれで……。

私はあまりそういう概念規定とかに拘泥するのが好きではない。概念規定の違いをあげつらって鬼の首を取ったように言う議論は好きじゃないんだよ。だからある種のクソ実証主義で，もうそれはみんな勝手に議論しろよと。しかし友子なら友子でこんな実態把握したやつはいないだろう。これをどうやって解釈しようともあなたのご自由ですよと，そういう研究ス

タイルだから，私のは。まあ，その辺についてみんな認めてくれているから，あまり反発はしないんだよ。ああ，どうぞ。友子＝クラフト・ユニオンでいいんじゃないですかと。

萩原　この『日本の鉱夫』とか，ぼくはすごくいい研究だと思いますけどね，その友子制度の歴史。ぼくは文学が好きだから，川端康成の『伊豆の踊子』ね。

村串　ああ，ありがとうね。あなたに教えられたね。

萩原　あれは最後に友子が出てくるんだよ。要するにインフルエンザで鉱夫と奥さんが死んじゃうんだよ。小さい子供を抱えたおばあさんがいて，両親が死んでしまったので，友子が，これは出身が茨城だから，上野駅までずっと船に乗って連れていってくれと頼むわけ，主人公，伊豆の踊子の一高生に。その話に出てくるんです。やっぱりちゃんとね友子が。

村串　あれはいい話だ。君は偉いよ，偉い。（笑）

増田　あなたも何かいろいろ……。

村串　萩原君が気が付いてくれたから。あれ，普通気が付かないよね。おれも前に読んでいるけど全然気が付いてない。それで萩原君に言われて，ああ，そうだと。私の本の最後に使わせてもらっているんだけど。もう感動的な話だよね。

萩原　やっぱり一種の共済組合ですよね，助け合う。

飯田　漱石の『坑夫』には出てこないんですか。

萩原　『坑夫』には出てこないね。あれは……。

村串　あそこでは「友子」という言葉は出てこない。事実上，出てきているんだけど，あまりそういう川端康成みたいにロマンチックな発想がないんだよね，漱石は。

萩原　やっぱり川端さんは，下積みの人はよく見ていますよ，ちゃんと。

村串　彼はさらっと書いているんだけど，友子ってわざわざ入れないで。鉱夫たちの慣習という格好で書いている。あれは非常に感動。

飯田　この女子研究で鉱夫，あるいは炭坑夫の労働研究というのは結構やっている人が多いわけでしょう。そこに付け加えたというか，あるいは新境地を開いたとか。

増田　あまり彼はそういう関心はないんだよ。

村串　いやいや，それはある。でもこういう格好でやったのは私だけしかいない。松島さんの女子研究は，昭和期の女子の断面を社会学的にバサッと切っているだけなので……，女子の歴史的な変遷がまったく解明されていない。

私は松島先生ってすごく偉いなと思うのは，結構私も高踏的に批判したりしたんだけれど，それに一切反発しないで非常に素直に読んでくれて，やっぱりこれはすごいと誉めてくれるんだ。それからいちいち弁解しない。歴史の分析がないと批判されれば，そういえば資料がなかったので，私のはそういう欠陥がありますと素直に……。素直と言ったら失礼なんだけど，認めて，一切反発しなかった。何年間か後に，先生と付き合う機会があったんだが，非常に真摯な人で，だから私は，そこら辺を感謝している。松島先生の隠れ弟子を自称しています。

女子研究はそのほか小さなものはあるんだよ，何人か。だけど，私のようなスタイルの研究はないから。市原博君は一橋を出て，あと北海道，北星学園……。そこで北海道の女子を随分研究しているんだけど，それで結

構私の研究についてもチュクチュクと批判的なことを言っているんだけど，友子研究が一冊にぽーんと出てこないんだよ。だからあなたは北海道についてこのぐらいのことをやれよと言ったんだけど，もう「いや，村串さんがやっているんだから」というので，今別なことをやっている。

東條君が最初，友子をやり出したと聞いていたんので，後継者が出てきよかった，集めた資料を全部あげようと思ってたんだが，友子をやらないで，例の繊維のほうにいっちゃったんだよ。

萩原　諏訪のね。

村串　うん。笑っちゃった。ああ，後継者が出てくるわけない。これだけやられちゃったら。でも友子の問題はまだ沢山残っているよ。

飯田　市原さんて今は駿河台大学で研究していますけど。

村串　知っているの？

飯田　いや，市原さんも東條さんもよく知っていますよ。

こういう制度は炭坑労働者の慣行なり実態の一部というと語弊があるけれども，本質的なことなのかなという気もちょっとするんですけれど。つまり賃労働者としての炭坑労働者，鉱夫にとっての，例えばそういう資本との関係とか，そういうようなものと，この友子制度というのがどういうかかわり合いになっているのかとか，そういう切り口でみると，どうなんでしょう。つまり賃労働の実態という歴史を描くときに，友子制度をどう位置付けるのか。その辺はどうですか。

村串　それは私が一番はっきり主張したことであって，だから友子というのは面白いので，江戸時代から大正期まで資本との直接関係がないんだよ。つまり自立的集団だから，勝手にやっている団体なんだよ。友子の威力のおかげで，経営者はそれを干渉できなかった。干渉はしてもそれを自分の組織に取り込めなかった。

ところが明治の足尾銅山の暴動以後，ジワジワ明治末から大正期にかけて，友子を従業員団体化する，つまり労資関係の真ん中にはめ込もうとするんだよね。そういうのは今まで誰も論じていないんだ。私が初めて。つ

まり労資関係の中に友子を取り込んでいって，それを企業内化とか従業員団体化と言っているんだけど，今までの人はみんなそれがわかっていなかった。

東條君はなぜか，私の本の題名『日本の伝統的労資関係』というのが気に入らないらしく，友子は労資関係じゃない，労資関係というのはミスリーディングだとか，批判している。

萩原　それはちょっと補足しないといけないんだけど，労働をやっている人にとっては，これは非常に重要なんです。なぜかというと，労働市場が変化していくときに，労資関係も一緒に変わっていくということがあって，それをちゃんと実証的に追跡して，かつそれをある程度理論化するということはかなり難しいんだよ。

日本の企業別組合が成立してくるプロセスなんてものすごく複雑だから，もう本当に膨大な研究を必要とする。そのうちの一つです。つまり友子というのがあって，だんだん，だんだん鉱山の会社が直接雇用に切り替えて，自分たちできちっとやっていくようになる。

村串　私は，友子は企業別労働組合の土壌だとか何とかと，一切理論付けていない。企業別労働組合の土壌みたいなものは，いろいろあるんだが，少なくとも鉱山のレベルで言えば，友子は企業別労働組合の原点，源流なんだよね。

萩原　古河鉱山の技師だった何とかという人……。要するに古河こそ労働問題で悩んで苦労した会社だから，どうやって安定した労資関係をつくるかというので，経営家族主義みたいなものをボーンと出してくるわけだよね。

友子研究『日本の伝統的労資関係』（正・続）の完成をめざして

村串　実はこの本の続刊を今まとめているんだよ。続刊のほうは，主に大正昭和期の足尾，別子，それから日立，すでに発表されている論文をまとめて出版するだけだけど。３大企業における友子制度の変遷を分析とい

うのは今まで誰もやっていないんだけど，それはすごく面白い……。

萩原　もし実証的に例えば友子機能が弱体化してきたところ，まだ企業の管理組織がきちんと確立していない過渡期のときに，ああいう暴動が起こってしまったり混乱するということだとすごく面白いんだよね。

村串　足尾の場合で，つまり明治40年に暴動が起きたあとに友子をどうやって企業内化していくかが，もう実に面白い。私の分析，今，推敲のために一生懸命読んでいるんだよ。「すげえ」と自分で感心している。自画自賛。足尾だけで100ページ近い。

それを別子銅山についてもやっているんだよね。別子はちょっとスタイルが違う。足尾の友子はすごく活躍したけど，別子ではあまり友子が活躍していない。それでもやっぱり別子の友子も問題があるというので，大正12年に従業員化されちゃうんだよ。しかし友子はつぶさない。これが何とも面白い。

足尾の場合もそう。最初，飯場組合というのに友子を入れてしまう。それで手足を縛っちゃうんだけど，末端では友子があるんだよね。それで飯場制度が問題だという労働組合の反対で，飯場制度を廃止してしまう。飯場制度はやめるんだけど友子は残っちゃう。それを何と言ったかというと，「鉱夫組合」という名前でね，従業員組合にして，その中に友子をまだ抱えている。それが，完全に友子がなくなるのは産業報國会ができた昭和15年，友子が解散させられる。戦後はなくなっちゃうんだ。

萩原　そうするともう定年後の研究テーマは決まっているじゃない。

増田　もう村串さん，それ，書いちゃったの。

萩原　こっちの続？

村串　『日本の鉱夫』は読みものだから。『日本の伝統的労資関係』の続篇は，来年の２月か３月に出る予定だよ。400ページぐらい。仮題は『大正昭和期の鉱夫職人組合・友子制度史の研究』。

増田　それで終わりか。あとは死亡だ。（笑）

村串　出版できないうちに死亡しちゃ困る。

萩原　これで正・続と出たらすごいね。

村串　本当は本屋と相談したんだよ。ちょっと無理だろうと判断して，いいや，続編だけでと。いつか労働関係の名著が復刻するときに期待したい。

萩原　そうそう。これがせいぜいこの正・続でまとまったらすごいよな。ぼくはそれに期待するね。その続のほうをちょこちょこっとやらないで。

村串　ちょこちょこじゃない。続だって独立してすごい……。

萩原　だからちゃんと正・続でこれもかなりの研究だから，正・続でセットで出ればこれは世界に恥ずかしくないですよ，これだけ日本の非鉄金属鉱山の労働史として。すごいですよ，これは本当に。

増田　うん。江戸期からだからな。

飯田　この仕事はそういう理論仮説を立てて実証ではなく，もうとにかく事実関係を集めてきて，言われるクソ実証主義に徹しようとした結果ということですが，それでもやっぱりいろいろな資料なり実態の一定の評価をし，これは重要，これはそうではないというようにまとめないといけないのじゃないでしょうか。

増田　それは理論仮説がゼロであっては論文は書けないよね。

村串　謙遜して理論仮説はないと言っているんだけど，ただ，ちょっとした事実で膨大な仮説をつくってしまうというのも，私は本当に鼻持ちならないと思っているから，まあまあ最小限，仮説を立てているけれど，結構，批判的な言辞を弄してはいますよ。東條君は友子を本格的に研究していないから批判しようがないけど。二村さんの友子論には結構噛み付いているよ。だけど私のほうが勝っているでしょうなあ。だってこんなにやっていないもの，彼。彼は足尾だけだから。

飯田　とりあえず友子研究を仕上げられて，その後レジャーという。これは要するに労働のちょうど反対……。

増田　欲望論。彼の欲望論の？ケーススタディだよ，きっと。

村串　いや，欲望論じゃないよ。もちろんあるけど，レジャー論で，働

かないということの意味をやっとここでわかった。(笑) そういうことだね，レジャーってね，労働は人間に本質的だというだけでなく，人間に本質的な意味があるんだ。

飯田　その際，今度はクソ実証主義ではなくて，どのような方法論でなされるべきかとか，文化史的な方法論をどう見るかとか，またそういうところからまず当たっているわけですけれども。

誰かレジャー論・国立公園研究を引き継いでくれないかな…

村串　結局，私は，実証主義者と言っているんだけど，心の隅ではやっぱり理論家志向があって，何かここで理論の面で勝負したいという気持ちがあったんだよ。レジャーのところは理論だと思ってスタートしたんだけど，やっぱりだめだった。結局はさっき言った唯物論か観念論かとかという，そういう方法論のころにぶつかるから，それを決着つけることが事実上できないし，しんどい。だからまたやっぱりレジャーの歴史とか実態とか実証主義でやっていたら，国立公園へいっちゃった。

飯田　結局レジャー一般でやろうとして，なかなか方法論的にも難しいし，かといってレジャーなんて幅広いわけだから。そこでどこにするかということで国立公園にいってしまったという。

村串　公園に遊びに行っちゃったという。(笑)

増田　これだってすごく面白いよね，確かに。だから彼はやっぱり好きなんじゃないかね，こういう丹念に集めてやるというね。結構マニアックなところがあるから。

村串　それでしつこいから止まらなくなっちゃう。ほかの人はみんなサラッサラッといい研究をやっているんだけど，なぜもっと突き詰めてやらないのかなと思っていると，今度は，つぎのテーマに移っていくでしょう。

萩原　ただ我々日本人は外国に留学すると，ちょっと日本の社会と違ったリズムというのを感じて，大都市は別だけど。ぼくなんかもアメリカ

で，金曜日の夜からもうどうやって週末をとみんな楽しみにしていて，その週末をどう過ごすかのために5日間じっと働く。そんな感じになっていくんだよね。

日本へ帰ってきてぼくがびっくりしたのは，土曜日は研究会がいっぱい詰まっているんだよ。何をやっているんだ，こいつらはと思って。(笑)

増田　本当に日本は変わってるよ。

萩原　うん。だから土曜日なんていうのは……。もうみんな土日，どうやって遊ぶかというのを……。遊ぶとか，あるいは教会に行って静かに暮らすとか。

増田　何だろうね，この差は。

萩原　せかせかした民族というか，国というか。

増田　レジャーというのが定着するということは難しいね，日本は。

村串　やっぱり宗教的なものが強いと思う。イスラム教だってキリスト教だって，お祈りからすべて遊びが始まっているわけだよね。日本にはお祈りする生活というのは弱いんだよ。少なくとも近代の日本に絶対，教会に行かなきゃならない，そういう人は，特別の宗教しかないんだ。やっぱりクリスチャンは日曜日は働いちゃいけないんだって……。

萩原　ユダヤ教から来ているんだけど。

村串　もちろん今は崩壊しているんだけど，それでもやっぱり相当程度残っているね。だから日本人は，あるいは日本の労働者はレジャーについて意識変革をしないといけない。

労働組合も，日本の資本主義自身が働きすぎてつぶれるということになるので，遊ぶ，レジャーをするということをしっかり理解してほしいと思って始めた研究だけれど，やっぱり難しいね。レジャー系は難しい。理論的なやつは特にそうだしね。

萩原　正村さんが最近書いているけど，経済が社会を破壊するという，ポランニーみたいな考え方なんだけど，つまり経済は豊かになろうと一生懸命働いて効率化しようとする。そうすると自然とか社会というのがま

ず，人間は家族がもうめちゃくちゃになってきちゃう。それで壊れていく。すべて自然的なものが壊れていくということ。

イギリスなんか割と早く産業革命のあと気付いて，これはやばいと。社会はこのままいくと解体してしまうというので，いろいろな社会を守っていく，自然を守っていくような動きが出てきたけど，日本は今だ。今やるかどうかなんだ。

村串　今この『国立公園成立史の研究』を出版してからいろいろ面白い反応があちこちで出てきた。一つは農水省関係の研究者がアタックしてきて，この間，盛岡に講演で呼ばれて行ったんだけど，よく見るとみんな農学博士とか林学博士とかという，そういう若い人たちがいっぱいいて，私の本にすごいショックを受けていたよ。それでぜひ一緒にやりたいとか，科研費でぜひ一緒にやろうといって来たんだよ。

私は，最初，酔っ払っていたからｅメールを読んで，うんうんと言ったんだけど，もう来年は定年でそんな元気がないだろうと反省してね，参加を断った。それに，農林水産省は今環境でしか生きていけないから，環境を取り込んでやろうとしているけど，「おれはそうだよ，もともと自由にやっているのに，農林省の連中と一緒にやったらもう何も農林省に言えなくなっちゃうじゃないか」とすぐ気が付いた。農林省が戦後の国立公園をだめにしたんだ。「いや，やっぱりいろいろ忙しくてできません」と言って参加をことわった。

今度は別のほうから電話がかった。すごい本が出たとほめてくれるわけ，「私は在野です」とかと言って。（笑）北海道の人でね，国立公園内の国有林伐採反対で農林省と闘った人らしい。研究費はでないけれど，こっちの人たちと一緒に研究したほうがおれらしくていいかと思ったりして。

萩原　ただ，この二つの本はすごく現代的だと思うの，テーマが。レジャーも非常に自然破壊的だし，国立公園も自然破壊的だし，農業も自然破壊のひどい産業だから，一見レジャーとか農業なんていうのは自然，エコロジカルなんて思っていたらとんでもない話だからね。すごい問題提起で

すよ，これは。国立公園なんてつくらないほうがいいという結論になるかもわからないよ。やたらに開発されたら自然はなくなっちゃうよと。

村串　そうはいっても，私は，「国立公園は自然保護の砦」という位置付けをしているわけだ。これがまたキャッチフレーズがいいんだ。それでみんな「おう，なるほど」と言って賛成してくれる。やっぱりすでに存在するものを大事にしていくことが必要だというのが私の戦略論。国立公園と言った以上，ある限界の中でそれを大事にしていく。そこは徹底的に守るという姿勢で，アメリカの国立公園がものすごく得意とするところだね。一生懸命若い人たちを国立公園で教育して，そこから自然保護運動の活動家を生み出している，意地を張ってね。そういうのっていいんじゃないかと思う。だからそういう意味で国立公園を自然保護の砦にして，そういう戦略でしばらくいきたい。

特に『国立公園成立史の研究』の続きを考えているんだよ。戦後の国立公園の乱開発とそれに反対する運動をしっかりと研究したい。戦前はそうでもないんだけど，戦後むちゃくちゃに開発優先になるんだ。そのむちゃくちゃをやったのが農林省だし，それから通産省だし。

萩原　各県もそうだよ。日光のいろは坂なんか見てみろよ，あんなすごいところまで全部道路をつくっちゃって。大気汚染，すごいよ。渋滞で1時間でもちょっとしか動かないんだから，紅葉の季節。

村串　それは整理してやらなきゃいけない。そういう研究は，国立公園派，国立公園族みたいな連中にはできないんだよ。国立公園を研究している人はみんなそうした連中なんだよ。だから研究ができないんだ，はっきり言って。だって飯の種を失っちゃうわけだから。だからできないんだ。そうすると，そういう意味では在野の人がやるしかないんだよ。だからその在野を集めて，ラジカル国立公園論をやろうと言って笑っているんだけどね。まあ老後の仕事な。

増田　老後の仕事，いっぱいできていいね。

萩原　いろいろなテーマを持っていて，うらやましいな，本当に。

村串　お金がないんだよ，スポンサーがいないから。

萩原　法政の名誉教授室にしげしげと来てもらって，法政の図書館をうんと利用して……。

村串　交通費3,500円かかるんだよ，1回来るのに。通えないよ。(笑)

萩原　続々とその友子の続編とレジャー研究を……。

村串　だから何と言うか，種をまいているところがあるから，誰か後継ぎが出てきてほしいと……。国立公園の研究については，三池炭鉱争議研究の平井陽一君に一緒にやろうと言ってるんだ。そうしたら，彼，「うん。そうです。そうです」と言っているんだけど，一向に共同研究をする気配が出てこない。彼はでも前から国立公園とかレジャー論をやりたいと言っているんだが。彼は現役だからお金を探してくれるんじゃないかと期待している。でも，一向にやろうといってこない。(笑)

一生メシを食わせてくれた法大生に感謝！

飯田　あと最後に研究の回顧ということだったのですが，1969年から37年間，特別助手，助教授，教授として学生に対する教育という点で，通信教育のテキストの話は出てきますが，それ以外の話はありません。学生に対する教育活動などを振り返ってみて，この37年間はどうでしたか。

当初は紛争で大変だったと思いますし，それからもちろんそれを何とか収束させる目的もあって，多摩移転という大きなことがあり，また多摩での新しい教育体制のもとでのゼミ生とのかかわり合いでも結構ですから，そういうことで回顧される部分を最後に。

村串　最後にいい締めの話題ですね。一つはマルクス主義者を自任している頃は教育と研究がごちゃごちゃになって，学生たちに随分それらしきものを，自分の本も含めて読ませたけれど，多摩に来る数年前から，もう教育と研究は別個にして，自分の研究関心を学生には押し付けないというスタイルでやってきた。サミュエルソンを読んだり，ケインズを読んだりして。

だから今の多摩の学生連中は，私がどういう研究をしているか全然知らない。私は非常に割り切って，研究は研究，それから教育は教育と分けてしまって，その代わり学生と楽しい勉強をする。そういう方向で飲んで遊んで，スキーに行って遊んで。私のゼミは，こんなこと言っちゃいけないけど，ゼミ試験をしたりしないから，だれでも入れる。だからそんなすごい学生は来ないんだけど，でもそういう来ない子も一生懸命，少しでも勉強に関心を持たせたり，来てくれた学生たちを大事に一生懸命それなりに勉強させている。

萩原　ぼくも最後に一言いい？　実は川上学部長さんが82年，83年と移転を準備して，そのときに増田君と，もう1人誰だったっけ，執行部。伊藤さんか。それから学部長が斉藤さんに交代して，そのときの主任が村串さんで私は副主任で，要するに移転のプランを立てた執行部と実行した執行部というので，ずっと村串さんとは一緒にやってきた。だからものすごくいろいろな思い出があって……。

ものすごく苦労しましたよね，本当にあの数年間というのは。だけどあれを一つのバネにして，ぼくたちの言い分だと法政大学はよみがえったと。困難だったけどいい時代を村串さんたちと一緒に担えたというのは，非常に思い出として残っています。

村串　忙しかったから研究できなかったというのは，私は一番言いたくなかった。いや，うそじゃないよ。本当なんだけど，だから研究できなかったとは意地でも言いたくない。特に私は法政出身者だから，法政出身者のやつはろくな研究をしないと，陰口をささやかれたり，後ろ指を指されることが一番嫌で，だから忙しくても忙しくなくても，とにかく忙しければ忙しいほど頑張った，そういう変な意地でやってきたようなところがあるんだよ。だからちょっと粗製乱造なところはお許しを願いたいということはある。自分でわかる。研究に綿密さを欠いちゃうんだ，やっぱりそういう焦りみたいなものがあってね。そんなことを最後にしみじみと感じるね。

増田　村串さんとはもう助手から考えると36年近く付き合っているんですが，最初の頃は本が出たら注がないじゃないかとか，何か形式的な批判ばかりしていたんだけど，結局こうやってたってみるとあなたは非常に，ある意味で言うと地道なところで結構いい成果を残して，私なんかは派手なことばかり言っている割には，ちっとも冴えた論文もあまりなしという感じになっているのですけれども……。そんな意味で非常に懐かしい，いろいろ。

ただ今日は話が出なかったところで，あなたの最高傑作は『孫育てイギリス留学日記』だから，あれも本当は紹介してあげればよかったなとはね。

萩原　そうだね。随筆集ね。

増田　文学青年と最初の頃出てきたけど，やっぱり何かそういうのを書きたいという欲求はどこかに残っていたのでしょうから，その話を一言加えて終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

村串　増田君の言い方は，私の研究に対する侮辱じゃあないか……。(笑)

飯田　だんだんと経済学そのものが，かつてのような輝きが何かなくなってきたような，多くの若い人を引きつけるような魅力がどうもなくなってきているような感じもあって，これから大変な時代になってきているなという気がします。私もあと20年ぐらいはまだ現役としてやらなければならないのですが，先生が研究をずっと続けてこられたとか，もちろん教育も含めてやってこられて，それを我々も受け継ぐかたちでやっていかなければならないと改めて感じた次第です。

村串　いい結論，どうもありがとうございました。ご苦労さま。ただ最後にひとこと言っておきたい。34歳で思いがけなく経済学部に採用され，やっと研究で飯が食えるようになったので，私は法政大学と学生に心から感謝してきました。教員の中には，研究で飯が食えていると思っている人が少なくないが，実際は，学生教育で，学生が払った授業料で給料をもら

っているわけね。だから，私は，大学の教師は，サービス業だと思っています。学生にいいサービスをしなくてはね。今いる学生の授業料で，われわれは飯を食わせてもらっているのだから，今経済学部にいる学生にサービスしないとね。最後の言葉としては，格調が低い話になってしまったけれど，私の偽らざる気持ちです。